

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2023年6月22日

【事業年度】 第56期(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

【会社名】 ジェコス株式会社

【英訳名】 GECOSS CORPORATION

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 野 房 喜 幸

【本店の所在の場所】 東京都中央区日本橋浜町二丁目31番1号

【電話番号】 (代表)03 - 3660 - 0777

【事務連絡者氏名】 財務部長 小 谷 智 史

【最寄りの連絡場所】 東京都中央区日本橋浜町二丁目31番1号

【電話番号】 (代表)03 - 3660 - 0777

【事務連絡者氏名】 財務部長 小 谷 智 史

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 最近5連結会計年度に係る主要な経営指標等の推移

回次		第52期	第53期	第54期	第55期	第56期
決算年月		2019年3月	2020年3月	2021年3月	2022年3月	2023年3月
売上高	(百万円)	108,378	114,327	110,206	113,997	120,521
経常利益	(百万円)	6,409	6,708	6,500	5,238	4,903
親会社株主に帰属する 当期純利益	(百万円)	4,352	4,406	4,549	3,326	3,428
包括利益	(百万円)	4,336	3,895	5,277	3,140	3,240
純資産額	(百万円)	53,097	55,791	59,794	59,429	59,104
総資産額	(百万円)	101,550	98,881	102,847	107,748	108,980
1株当たり純資産額	(円)	1,458.72	1,532.77	1,642.82	1,632.75	1,748.77
1株当たり 当期純利益金額	(円)	119.57	121.05	124.97	91.38	95.05
潜在株式調整後1株 当たり当期純利益金額	(円)		-	-	-	-
自己資本比率	(%)	52.3	56.4	58.1	55.2	54.2
自己資本利益率	(%)	8.4	8.1	7.9	5.7	5.8
株価収益率	(倍)	8.7	6.5	7.7	8.8	9.3
営業活動による キャッシュ・フロー	(百万円)	1,252	11,315	8,504	9,097	2,952
投資活動による キャッシュ・フロー	(百万円)	3,568	3,916	2,432	2,610	4,750
財務活動による キャッシュ・フロー	(百万円)	925	5,934	1,275	3,234	3,728
現金及び現金同等物の 期末残高	(百万円)	760	2,225	7,017	10,286	4,767
従業員数	(名)	1,240	1,258	1,269	1,284	1,363

- (注) 1 売上高等の金額は、百万円未満を四捨五入して表示しております。
2 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
3 株価収益率は、連結決算日における株価に基づいて算出しております。
4 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を第55期の期首から適用しており、第55期以降に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を適用した後の指標等となっております。

(2) 提出会社の最近5事業年度に係る主要な経営指標等の推移

回次	第52期	第53期	第54期	第55期	第56期
決算年月	2019年3月	2020年3月	2021年3月	2022年3月	2023年3月
売上高 (百万円)	97,200	102,850	99,444	103,557	105,826
経常利益 (百万円)	5,578	5,829	6,355	5,019	4,907
当期純利益 (百万円)	4,690	4,004	4,643	3,273	3,607
資本金 (百万円)	4,398	4,398	4,398	4,398	4,398
発行済株式総数 (株)	36,436,125	36,436,125	36,436,125	36,436,125	33,795,746
純資産額 (百万円)	45,412	48,066	51,419	51,039	51,247
総資産額 (百万円)	91,039	88,830	92,147	96,646	96,664
1株当たり純資産額 (円)	1,247.67	1,320.62	1,412.75	1,402.33	1,516.38
1株当たり配当額 (円)	35	35	35	35	35
(内1株当たり 中間配当額) (円)	(17)	(15)	(15)	(15)	(15)
1株当たり 当期純利益金額 (円)	128.85	110.00	127.56	89.92	99.99
潜在株式調整後1株 当たり当期純利益金額 (円)		-	-	-	-
自己資本比率 (%)	49.9	54.1	55.8	52.8	53.0
自己資本利益率 (%)	10.8	8.6	9.3	6.5	7.1
株価収益率 (倍)	8.0	7.1	7.5	8.9	8.8
配当性向 (%)	27.2	31.8	27.4	38.9	35.0
従業員数 (名)	731	738	754	738	752
株主総利回り (比較指標：配当込み TOPIX) (%)	96.7 (95.0)	77.2 (85.9)	96.6 (122.1)	85.3 (124.6)	95.7 (131.8)
最高株価 (円)	1,240	1,170	1,040	994	934
最低株価 (円)	952	665	712	766	765

- (注) 1 売上高等の金額は、百万円未満を四捨五入して表示しております。
2 2019年3月期の1株当たり配当額35円には、創立50周年記念配当5円を含んでおります。
3 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
4 株価収益率は、貸借対照表日における株価に基づいて算出しております。
5 最高株価及び最低株価は、2022年4月3日以前は東京証券取引所市場第一部におけるものであり、2022年4月4日以降は東京証券取引所プライム市場におけるものであります。
6 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を第55期の期首から適用しており、第55期以降に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を適用した後の指標等となっております。

2 【沿革】

当社(旧 富士鋳業株式会社 1946年8月1日設立、1974年8月30日に山本建材リース株式会社に商号変更)は、1975年10月1日を合併期日として、旧山本建材リース株式会社の株式額面金額変更のため、同社を吸収合併いたしました。合併前の当社は、休業状態であり、したがって法律上消滅した旧山本建材リース株式会社が実質上の存続会社であるため、以下における記載は、すべて実質上の存続会社にかかるものを記載しております。

当社は、1968年6月20日、川崎製鉄(株)(現 J F E スチール(株))の大型H形鋼、鋼矢板等の建設工用仮設鋼材の賃貸、販売を目的として、山本産業(株)(1983年10月、川鉄商事(株)(現 J F E 商事(株))へ吸収合併)の全額出資により、資本金100百万円をもって、千葉県印旛郡白井町(現 千葉県白井市)に設立されました。

その後の主な変遷は次のとおりであります。

1969年1月	名古屋営業所(現 名古屋支店)開設
1969年1月	技術部を設置、構造計算、図面作成業務開始
1969年4月	白井工場(現 東京工場)開設
1970年2月	名古屋工場開設
1970年6月	本店を東京都港区に移転
1971年11月	スチールセグメント製作開始
1972年4月	仙台営業所(現 東北支店)開設
1973年1月	一般建設業(建築工事業、とび・土工工事業)の東京都知事許可を取得
1974年6月	仙台工場開設
1974年10月	H形支保工製作開始
1975年4月	五光鉄構(株)を合併、長沼工場開設
1975年6月	一般建設業(鋼構造物工事業)の東京都知事許可を取得
1976年5月	一般建設業(建築工事業、とび・土工工事業、鋼構造物工事業)の建設大臣許可を取得
1978年1月	コルゲートパイプ、ライナープレートの営業開始
1978年9月	千葉(現 千葉支店)、北関東(現 北関東支店)各営業所開設
1980年9月	横浜営業所(現 横浜支店)開設
1981年7月	建設機械の本格的営業開始
1981年12月	ソイルセメント柱列式連続壁工法の施工を開始
1982年10月	水戸営業所(現 水戸支店)開設
1985年10月	(株)ヤマケンレンタル千葉(現 連結子会社レンタルシステム(株))、(株)ヤマケンレンタル横浜(現 連結子会社レンタルシステム(株))を設立、小型建設機械賃貸の子会社による多店舗展開を開始
1985年10月	特定建設業(土木工事業、建築工事業、鋼構造物工事業)の建設大臣許可を取得
1986年1月	高所作業車の営業開始
1990年4月	営業基盤を拡大のため川商建材リース(株)を合併、商号を川商リースシステム株式会社に变更 合併により、大阪本社(現 大阪営業部)、岡山・広島・四国・九州支店、鹿児島営業所(現 南九州支店)、大阪・岡山(水島工場に改称)・福岡・鹿児島工場の各事業所を設置
1994年7月	四国工場開設
1994年8月	株式を東京証券取引所市場第二部に上場
1995年4月	中国工場開設
1996年9月	商号を川商ジェコス株式会社に变更
1996年9月	株式が東京証券取引所市場第一部に指定
1999年4月	新潟支店開設
1999年4月	日本海工場開設
2000年6月	本店を東京都中央区に移転
2002年5月	一般建設業(とび・土工工事業)、特定建設業(土木工事業、建築工事業、鋼構造物工事業)の国土交通大臣許可を取得
2002年10月	連結子会社(株)レンタルシステム東京が同(株)レンタルシステム大阪を合併、(株)レクノス(現 連結子会社レンタルシステム(株))に商号変更、建機センター業務を(株)レクノスに移管し、建設機械事業を再編
2004年1月	連結子会社(株)レクノスが(現 連結子会社レンタルシステム(株))が同(株)レンタルシステム四国及び(株)レンタルシステム広島を合併
2004年7月	商号をジェコス株式会社に变更
2005年8月	東京工場及び大阪工場がISO9001認証を取得(鋼製セグメントの製造)

2005年10月 富里機械センター開設
2013年4月 北海道地区における事業を会社分割し、連結子会社であるジェコス北海道㈱に承継
2014年12月 Ecoラム工法が国土交通省 新技術情報提供システム(NETIS)に登録(2016年7月国土技術開発賞(創意開発技術賞)受賞、2019年8月NETISにV登録(事後評価済み技術)として再登録)
2016年4月 連結子会社㈱レンタルシステム芙蓉が同㈱レクノスを合併、㈱レンタルシステム関東(現 連結子会社レンタルシステム㈱)に商号変更
2016年8月 J F E スチール㈱との共同出資により、ベトナムに現地法人のGECOSS VIETNAM COMPANY LIMITEDを設立
2016年9月 長沼工場がISO9001認証を取得(鋼構造物の製造)
2017年11月 「ジェコスグループ10年VISION」策定
2018年10月 連結子会社ジェコス北海道㈱を吸収合併し、北海道地区における事業を承継
2020年7月 長沼工場が鉄骨製作工場認定のHグレードを取得
2022年4月 連結子会社㈱レンタルシステム関東が同 ㈱レンタルシステム東北、㈱レンタルシステム東海、㈱レンタルシステム西日本、㈱レンタルシステム信越を吸収合併、レンタルシステム㈱に商号変更し、建設機械事業を再編
2022年4月 ㈱オトワコーエイの全株式を取得し、連結子会社化
2022年4月 株式が東京証券取引所プライム市場へ移行

3 【事業の内容】

当社グループ(当社、連結子会社ならびに関連会社)は、建設仮設材の賃貸及び販売ならびに仮設工事の設計、施工等を主たる事業内容とする当社を中核として、各建設作業所における関連商品群を取扱い、総合的な営業活動を全国規模で展開しております。

(重仮設事業)

重仮設事業におきましては、当社ならびに連結子会社5社、関連会社2社にて展開しております。

連結子会社のうちジェコス設計㈱は設計及びコンサルティング等を、ジェコス工事㈱は仮設工事の安全施工に関する技術的支援等を、㈱オトワコーエイは仮設工事、基礎杭工事、地中障害撤去工事等を行っております。また、トラック・エンド・メンテナンス・サービス㈱は、建設仮設材等の運送を行っており、当社はその委託をしております。GECOSS VIETNAM CO., LTD.は、ベトナム・ホーチミンを拠点に建設仮設材の賃貸、販売等を行っております。

関連会社のうち協友リース㈱はH形鋼桁材、鋼矢板等を保有、管理しており、当社はその提供を受けて顧客に供給しております。また北日本建材リース㈱は当社と建設仮設材等の賃貸借を行っております。

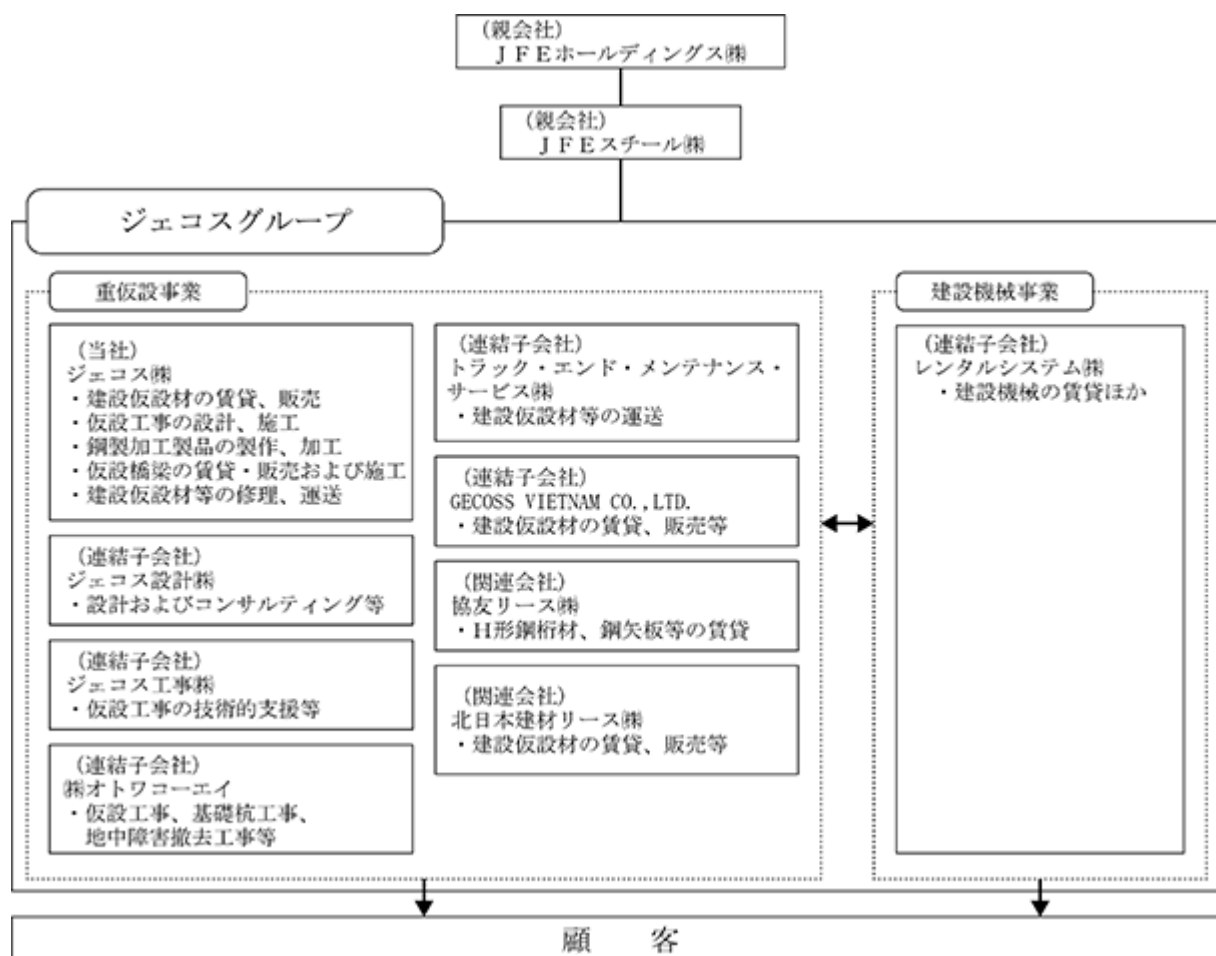
(建設機械事業)

建設機械事業におきましては、連結子会社のレンタルシステム㈱が建設用機械の賃貸を行っております。また、当社と情報を共有化し、連携営業を行うことで重仮設事業とのシナジー効果の実現を図っております。

(親会社)

JFEスチール㈱は間接所有も含め当社議決権数の47.65%を所有する親会社であり、JFEスチール㈱の完全親会社であるJFEホールディングス㈱は、当社議決権数の59.50%を所有する親会社であります。当社が取扱う建設仮設材の一部は、JFEスチール㈱製の鉄鋼製品をJFEグループから調達しております。

当社グループの概要図は下記のとおりであります。



- (注) 1 北日本建材リース㈱は持分法非適用の関連会社であります。
 2 2023年6月1日付でFUCHI Pte. Ltd.の発行済株式の30%を取得し、持分法適用関連会社といたしました。

4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金又は 出資金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の所有 (被所有)割合		関係内容
				所有割合 (%)	被所有割合 (%)	
(親会社) J F Eホールディングス 株 7	東京都 千代田区	147,143	J F Eグループ の経営戦略立 案・管理		59.50 (59.50)	J F Eスチール(株)の完全親会社で あります。
J F Eスチール(株)	東京都 千代田区	239,645	鉄鋼製品の製 造・販売		47.65 (0.01)	役員の兼任等 当社への転籍 5名 当社役員兼任 1名 営業上の取引 当社は同社が取り扱う商品等 の仕入れを行っております。
(連結子会社) 株オトワコーエイ	静岡県 沼津市	45	重仮設	100.00		役員の兼任等 当社役員兼任 1名 当社従業員兼務 1名 当社従業員出向 1名 資金の融資 貸付金 49百万円 営業上の取引 当社は同社と仮設工事におい て取引があります。
レンタルシステム(株) 8	東京都 中央区	40	建設機械	100.00		役員の兼任等 当社役員兼任 1名 当社従業員兼務 1名 当社従業員出向 1名 営業上の取引 当社は同社が取扱う建設機械 等において取引があります。
ジェコス設計(株)	東京都 中央区	30	重仮設	100.00		役員の兼任等 当社従業員兼務 2名 当社従業員出向 1名 営業上の取引 当社は同社と設計及びコンサル ティング等において取引が あります。
ジェコス工事(株)	東京都 中央区	30	重仮設	100.00		役員の兼任等 当社従業員兼務 2名 当社従業員出向 1名 営業上の取引 当社は同社と仮設工事におい て取引があります。

名称	住所	資本金又は 出資金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の所有 (被所有)割合		関係内容
				所有割合 (%)	被所有割合 (%)	
トラック・エンド・メンテ ナンス・サービス(株)	千葉県 白井市	20	重仮設	100.00		役員の兼任等 当社従業員兼務 2名 当社従業員出向 1名 資金の融資 貸付金 153百万円 営業上の取引 当社は同社と建設仮設材等の 運送を委託しております。
GECOSS VIETNAM CO., LTD.	ベトナム 社会主義 共和国 ホーチミ ン市	1,400千USD	重仮設	96.43		役員の兼任等 当社役員兼任 1名 当社従業員出向 1名 営業上の取引 当社は同社と役務提供におい て取引があります。
(持分法適用関連会社)						
協友リース(株)	千葉県 柏市	30	H形鋼桁材等の 賃貸	50.00		役員の兼任等 当社役員兼任 2名 当社従業員出向 1名 営業上の取引 当社は同社からH形鋼桁材、 鋼矢板等を賃借してしま す。

- (注) 1 連結子会社の「主要な事業の内容」欄には、セグメントの名称を記載しております。
2 連結子会社のうちには特定子会社に該当する会社はありません。
3 連結子会社及び持分法適用関連会社のうちには有価証券届出書又は有価証券報告書を提出している会社はあ
りません。
4 議決権所有割合及び被所有割合の()書きは、内数で間接所有の割合を示しております。
5 役員の兼任等に記載されている当社役員兼任人数には、執行役員を含んでおります。
6 2023年6月1日付でFUCHI Pte. Ltd.の発行済株式の30%を取得し、持分法適用関連会社といたしました。
7 有価証券報告書を提出しております。
8 レンタルシステム(株)については、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く)の連結売上高に占める割合が
10%を超えております。

主要な損益情報等	売上高	14,254百万円
	経常利益	206 "
	当期純利益	122 "
	純資産額	6,526 "
	総資産額	11,586 "

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2023年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数(名)
重仮設	961
建設機械	402
合計	1,363

(注) 従業員数は就業人員であります。

(2) 提出会社の状況

2023年3月31日現在

従業員数(名)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
752	42.5	17.0	7,188,527

セグメントの名称	従業員数(名)
重仮設	752
合計	752

- (注) 1 従業員数は就業人員であります。
2 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。
3 平均年齢、平均勤続年数、平均年間給与には受入出向者及び社外への出向者は含まれておりません。

(3) 労働組合の状況

提出会社及び連結子会社には労働組合は結成されておりませんが、労使は相互尊重精神のもと機会あるごとに忌憚のない意見交換を行い意思疎通を図っており、健全かつ円滑な労使関係が確立しております。

(4) 管理職に占める女性労働者の割合、男性労働者の育児休業取得率及び労働者の男女の賃金の差異

提出会社

当事業年度				
管理職に占める 女性労働者の割合 (%) (注1)	男性労働者の 育児休業取得率 (%) (注2)	労働者の男女の 賃金の差異(%) (注1)		
		全労働者	正規雇用 労働者	パート・有期 労働者(注3)
10.6	31	59.3	57.8	69.9

- (注) 1 「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(平成27年法律第64号)の規定に基づき算出したものであります。
2 「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(平成3年法律第76号)の規定に基づき、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律施行規則」(平成3年労働省令第25号)第71条の4第2号における育児休業等及び育児目的休暇の取得割合を算出したものであります。
3 パート・有期労働者は、再雇用制度適用者等の期間を定めて雇用している嘱託社員であります。

連結子会社

当事業年度					
名称	管理職に占める 女性労働者の割合 (%) (注1)	男性労働者の 育児休業取得率 (%) (注1)	労働者の男女の 賃金の差異 (%) (注1)		
			全労働者	正規雇用 労働者	パート・有期 労働者
レンタルシステム 株式会社	5.8	-	70.2	70.9	54.4

(注) 1 「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(平成27年法律第64号)の規定に基づき算出したものであります。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末において当社グループが判断したものであります。

(1) 中期経営計画における施策

当社グループは、前中期経営計画期間（2018～2020年度）を『ジェコスグループ10年VISION』の第一段階と位置づけ、既存事業の収益力強化、事業拡大分野の体制整備、生産性と働きやすさ向上のための投資といった、基盤確立の施策を推進してまいりました。

これに続く第二段階として、2021年4月に策定いたしました中期経営計画では、重仮設事業の競争力をさらに高め、業界トップシェアのポジションを盤石化するとともに、周辺事業の規模拡大を加速させ、事業規模・利益水準ともに拡大を目指します。

堅調な需要は想定されるものの、温暖化・自然災害・感染症等、その影響が想定し難い環境変化も予想される中、さまざまな変動要因に柔軟かつスピード感をもって対応し、『10年VISION』で掲げる「安心、安全な社会の建設に貢献し、働きがいの向上を追求する企業」の実現に向け、企業価値向上を進めてまいります。

[事業環境認識]

中期経営計画対象期間（2021～2024年度）における当社グループを取り巻く事業環境として、建設需要は長期的には、再開発案件、老朽化インフラの更新、災害対策等により、堅調に推移するものと想定されます。また、首都圏以外でもリニア、大阪万博、北海道新幹線といったプロジェクトに関連する案件が控えています。

[主な取り組み]

重仮設事業のコスト競争力向上とシェア拡大

主力事業である重仮設の賃貸、工事については、直接的なコストの削減のみならず、管理業務関連を中心とした生産性アップ、技術レベル向上による顧客指向提案力の強化等、総合的なコスト競争力を磨き、売上規模・利益水準の拡大に注力いたします。

加工事業の規模拡大

もう一つの柱である加工事業については、専用工場を有するという特色を活かしてシナジーを最大限に発揮するとともに、全国各地域での営業強化、対応可能製品の拡充を進め、事業規模の拡大を図ります。

地下工事一式受注、仮設橋梁事業、インフラメンテナンス事業の成長加速

地下工事一式受注は、前中期経営計画期間に水処理、地盤改良、本杭工事等で実績を積み重ねてまいりましたが、さらに技術レベルの向上を進め、「地下工事のプラットフォーマー」としてのポジション確立を目指します。

仮設橋梁事業、インフラメンテナンス事業では、受注活動の強化、競争力のある新商品開発を進め、特色ある事業として市場で存在感を持つ規模まで育成してまいります。

これらの事業については、JFEグループとの連携強化、M&Aを含めたパートナー企業選定を進め、成長を加速させます。

建機事業の収益力向上

堅調な需要が見込まれる土木分野をはじめ、新たな需要を掘り起こし、これに合わせた体制強化、新商品投入を進めます。併せて、自社及び提携等による事業エリア拡大にも、引き続き取り組みます。さらに、建機関連システムのリフレッシュ等により管理業務の生産性を改善し、収益力を向上させます。

海外展開における事業モデル再構築

ベトナム事業については、進出当初に想定していたODA案件対応だけではなく、現地パートナーとの提携、ジェコスの技術力を生かした事業の展開等により、収益を上げられる構造に転換することを目指します。

ICT推進、人材育成

上記の施策を遂行するにあたり、昨年来のコロナ対策として従来以上に進めてきたペーパーレス・押印廃止等の執務環境整備をICTによりさらに推進します。あわせて社内のチャレンジ・マインドを高め、意思決定をスピードアップするために、キャリアや年齢、性別を問わず、すべての社員が生き生きと活躍できるよう、各階層でレベルアップした人材育成に向けた取り組みを進めます。

なお、主要財務指標の、最終年度(2024年度)における数値目標は以下の通りです。

		中期経営計画 (2024年度目標)	参考	
			2021年度実績	2022年度実績
収益目標 (連結)	売上高	1,400億円	1,140億円	1,205億円
	経常利益	100億円	52億円	49億円
	ROS	7%	4.6%	4.1%
財務目標 (連結)	ROE	10%程度	5.7%	5.8%
	自己資本比率	60%程度	55.2%	54.2%
	D/Eレシオ	実質無借金継続	3.6% (実質無借金)	3.8% (実質無借金)
配当性向(連結)		30%程度	38.3%	36.8%

[SDGsへの取り組み]

当社が掲げる「安心、安全な社会の建設への貢献」というコンセプト及び鋼材をリースし再利用するという事業モデルそのものが、SDGsに合致するものと考えております。

その上で、個別には再生可能エネルギーやゼロカーボン投資に関連する案件を通じた持続可能な社会の実現、ベトナムはじめASEANでの活動による発展支援も行っています。また社員との関係では、安全と健康の確保を最優先とすることはもちろん、性別を問わず活躍の場を用意し、働きがいの向上に資する施策を進めています。

中期経営計画期間においてもこれらの取り組みを継続してまいります。

(2) 次期の経営環境と課題

2023年度の事業環境は、足下は厳しい状況が続くものの、大型物件の立ち上がりが徐々に本格化し、需要は上向くと見えています。一方、諸物価の高騰は当面続くものと見込まれます。

そのような中、重仮設事業ではコストアップを反映した価格適正化に最重点を置き、LRBの追加導入や㈱オトワコーエイとの連携強化による工事採算性アップ、敷鉄板供給拠点の新設、工場への多品種水洗機導入等による生産性向上も進めます。加工分野においては、対応品種を拡大すること等により受注増加に注力します。また仮設橋梁を自社化し、東西にヤードを新設して事業拡大を図ります。海外については本格的展開の第一歩として、シンガポールのFUCHI Pte. Ltd.へ資本参加を行います。これらの施策を実施するものの、売上高は引合物件の形態構成差により微減、経常利益も人的資本への投資等による販管費の増加があり微減の計画としております。

建設機械事業では、ジェコスとの協業や拠点間の連携を強化し、賃貸用資産の機動的配置や構成見直しを行うとともに、BROKK（無人施工ロボット）の拡販を強化すること等により、増収増益を計画しています。

以上により、2023年度の連結業績見通しにつきましては、売上高120,000百万円、営業利益4,650百万円、経常利益5,000百万円、親会社株主に帰属する当期純利益は3,300百万円を見込んでおります。なお、セグメント別の業績見通しは下表の通りです。

(単位：百万円)

	2023年3月期 実績 (2022/4～2023/3)		2024年3月期 予想 (2023/4～2024/3)		前年同期比			
	第2四半期 (累計)	通期	第2四半期 (累計)	通期	第2四半期(累計)		通期	
					増減額	増減率(%)	増減額	増減率(%)
売上高	54,575	120,521	56,500	120,000	1,925	3.5	521	0.4
重仮設事業	48,754	108,744	50,300	106,700	1,546	3.2	2,044	1.9
建設機械事業	6,925	14,254	7,100	15,000	175	2.5	746	5.2
調整額	1,104	2,477	900	1,700	204		777	
経常利益	1,817	4,903	2,000	5,000	183	10.1	97	2.0
重仮設事業	1,767	4,844	2,000	4,700	233	13.2	144	3.0
建設機械事業	202	206	100	450	102	50.4	244	118.9
調整額	151	146	100	150	51		4	

セグメント売上高の調整額はセグメント間の内部売上高又は振替高の消去額であり、セグメント利益の調整額は連結調整であります。

2 【サステナビリティに関する考え方及び取組】

文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末において当社グループが判断したものであります。

(1) サステナビリティ課題全般への取り組み

ガバナンス

持続可能な環境、社会の実現と企業価値の向上に向けての当社グループの取り組みの方針として、2022年6月に「サステナビリティ課題への取り組みの基本方針」を取締役会で決定しました。

上記方針においては、必要なガバナンス体制を構築し、特に下記の重点課題に取り組むことにより、ステークホルダーへの社会的責任を果たし、持続可能な社会の発展に貢献する、こととしております。

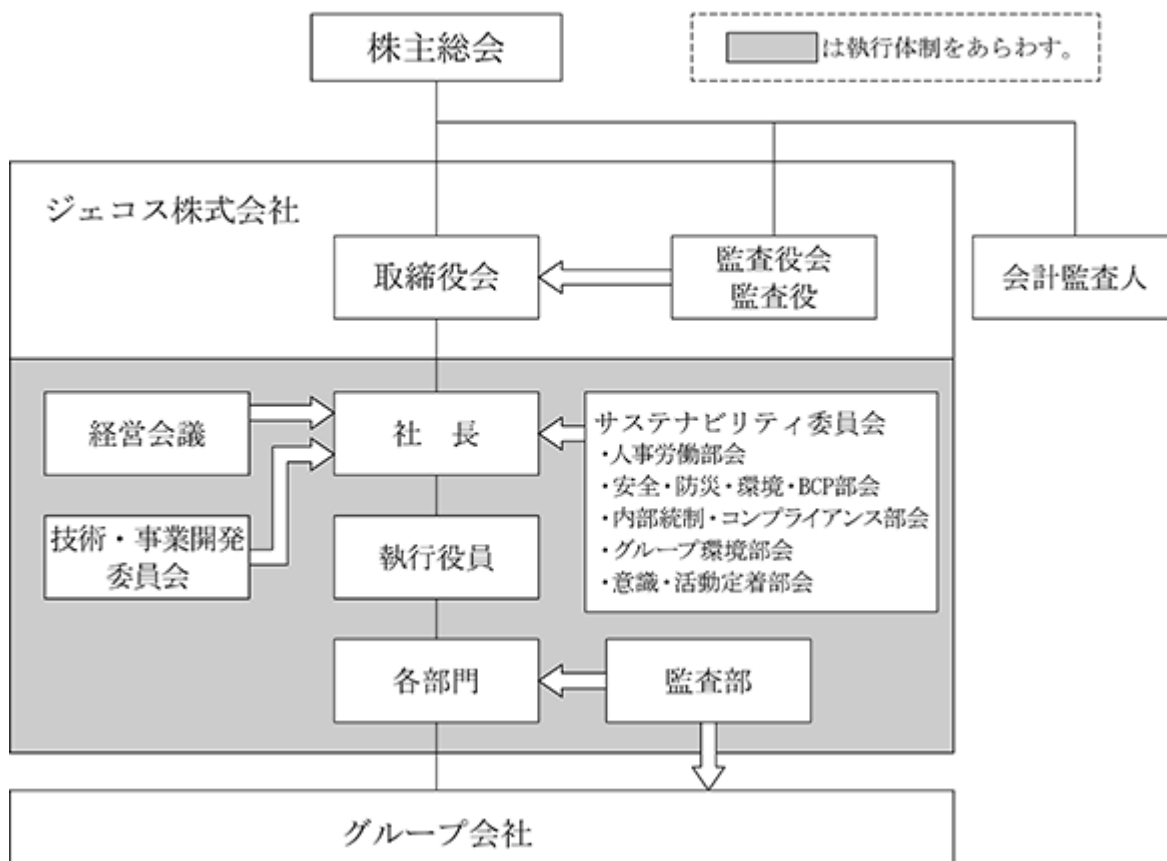
- ・鋼材のリユースを中心とした事業モデルを常に進展させ、資源循環型経済の実現に取り組む
- ・サプライチェーン全体の温室効果ガスの排出削減に取り組む
- ・災害復旧に貢献するとともに、防災、減災、国土強靱化の実現に取り組む
- ・関係するすべての人の人権を尊重するとともに、その安全と健康の確保に取り組む
- ・従業員の働きがいの向上と、多様な人材の活躍の場の提供に取り組む
- ・社会との協調を図り、積極的に社会貢献活動に取り組む

上記課題への取り組みについては、サステナビリティ委員会（2023年4月にCSR推進委員会から名称変更）や技術・事業開発委員会において検討・審議し、その内容を社長へ答申した上で、状況に応じて取締役会に報告することとしております。

リスク管理

サステナビリティ委員会内に設置する、人事労働部会、安全・防災・環境・BCP部会、内部統制・コンプライアンス部会、グループ環境部会、意識・活動定着部会の各部会において、上記サステナビリティ課題への具体的取り組みを検討・推進するとともに、それぞれの課題に関わるリスクを把握・評価し、その内容についても委員会にて検討・審議しております。また、内部統制・コンプライアンス部会においては全社横断的なリスクの把握・評価もっており、委員会活動の中での連携を図っています。

【企業統治体制の模式図】



(2) 人的資本への取組み

人材の多様性の確保や各々の業務領域の拡大の観点から、人材育成方針とそれに基づく充実した教育カリキュラムを策定し、計画的なOJTと階層等に応じた各種研修を行っております。

* 人材育成方針

挑戦意欲が高く、環境変化へ柔軟に対応できる人材を目指し、多様な人材がそれぞれの力を最大限に発揮できる場を提供し、成長できる仕組みを構築していきます。社員一人一人の成長と働きがいの追求により、企業価値向上につなげ安心・安全な社会の建設へ貢献し続ける企業を目指します。

対象層	各層の目指すべき姿
マネジメント層	中長期的な目標達成に向けて、当事者意識・チャレンジ精神を持ち環境変化に柔軟な発想を備え行動する
中堅層	次期マネージャー候補の育成として早期にマネジメント基礎を習得させ、後輩育成とともに視野を広げていく
若手層	当社事業内容や製品知識の習得を行い、OJTマニュアルを通じ各部署での業務レベルアップを図る

研修制度

階層	資格	階層別研修	テーマ別研修				部署別研修				
マネージャー	理事	理事研修	シニア活躍推進研修	講演会	海外研修	コーチング研修	語学研修	オンラインGWSスキル・品質管理・メタルヘルス研修・人権啓発研修等	現場管理スキルアップ研修(営業・工事・シエコス工事)	現場力向上研修(営業・工事・技術・工場・事務)	安全研修(職長教育他)
	部長	部店長研修 工場長研修 マネジメント研修 新任G長研修									
	副部長										
	課長										
次世代マネージャー	課長代理	次世代マネージャー研修	女性活躍推進研修	リススキル	JFE交流会・土建	若手育成マ	論理的思考				
中堅社員	係長	係長研修									
	基幹	基幹1級論文研修									
若手社員	主務	3年目研修						2年目研修			
新入社員		新入社員研修									

また、併せて、当社は社員の働きがいの向上や労働環境の改善、健康の確保等に向けての社内環境整備方針を策定し、それに基づくさまざまな取り組みを進めるとともに、その具体的目標と実施状況の開示も行っております。

* 社内環境整備方針

社員一人一人の働きがい向上に向けて、労働環境改善や柔軟な働き方の制度整備を進め、仕事と育児・介護の両立可能な社内環境を目指します。また、生活習慣病・メンタルヘルス・食生活改善等の健康経営にも注力し、数値目標を掲げています。

取組み事例

- ・フレックスタイム制
- ・在宅勤務
- ・年休70%取得目標
- ・女性活躍リーディングカンパニー認証（大阪市）
- ・特定保健指導



健康

項目	単位	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	中期計画（2024年度）
ストレスチェック実施率		93.0%	95.0%	98.0%	97.0%	97.3%	-
定期健康診断受診率	%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	-
二次検査受診率		統計無し	31.9%	42.6%	35.4%	集計中	50.0%

ワークライフバランス

項目	単位	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	中期計画（2024年度）
1人あたり年間平均時間外※1	時間	28.7	26.1	25.0	29.1	27.9	25.0
平均年休取得日数	日	9.0	12.1	13.6	13.3	13.4	-
平均年休取得率	%	46.1%	63.5%	68.1%	69.9%	70.9%	70.0%
育児休業等取得者数※2	人	10	10	9	7	15	-
男性		26.7%	21.1%	23.1%	11.8%	31.8%	50.0%
女性	%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	-
育児のための短時間勤務取得者数	人	24	33	28	32	33	-

※数値は当社単体を対象とする

※1：36協定対象者

※2：男性の育児休業等取得者数・取得率は、子が生まれた時の特別休暇を取得した男性を含む

(3) 気候変動への取り組み

重仮設事業では賃貸用鋼材の90%をリユースし、また最終的にはスクラップとしてリサイクルしており、事業自体が循環型社会構築への貢献、温室効果ガス削減に大きな役割を果たしていると考えています。気候変動への取り組みは、極めて重要な課題と認識しており、「鋼材のリユースを中心とした事業モデルを常に進展させ、資源循環型経済の実現に取り組む」、「サプライチェーン全体の温室効果ガスの排出削減に取り組む」をマテリアリティとして設定しています。

当社では、気候変動に関するグループの取り組みを主導するため、2022年5月にサステナビリティ委員会の下にグループ環境部会を新たに設置し検討を進めてきました。グループ環境部会は、技術部門と経営企画部門の担当執行役員が共同で部長を務め、全社横断で取り組みを推進しています。グループ環境部会での検討内容は、代表取締役社長が委員長を務めるサステナビリティ委員会で協議し、取り組み内容の決定、進捗確認を行っています。また議論の内容は、取締役会へ報告され、取締役会は重要な経営・事業戦略として議論し方針を決定するのに加え、気候変動課題への実行計画等について監督を行っていきます。

2022年度は、グループ環境部会において温室効果ガス排出量の削減目標並びに取組内容について検討し、サステナビリティ委員会で議論、決定のうえ2023年3月に取締役会において方針決議しました。当社は、2050年までに当社グループの温室効果ガス排出量を実質ゼロにすることを目指して、2030年に向けた温室効果ガス排出量の削減目標を策定しました。

また、当社は2023年4月に「気候関連財務情報開示タスクフォース(TCFD)」に賛同を表明しました。今後グループ環境部会において、将来の気候変動が事業活動に与えるリスク、機会及び財務影響について、シナリオ分析の手法を用いて評価し、2024年3月までに、TCFDのフレームワークに沿った内容での情報開示を当社ホームページにて行ってまいります。

当社単体の温室効果ガス削減目標

対象Scope	目標(2021年度比)	2021年度実績(t-CO2e)
Scope 1 及びScope 2	2030年度までに2021年度の温室効果ガスの排出量を30%削減	15,850
Scope 3 (カテゴリ1 ¹ , 4, 5) ²	2030年度までに2021年度の温室効果ガスの排出量を20%削減	362,990

1 購入した鋼材、セメントが対象

2 Scope 3 総排出量の75%を占め自社の削減努力を反映できる品目が対象

2021年度の当社単体の温室効果ガス排出量のScope別並びにカテゴリ別の内訳については、当社ホームページに開示しております。なお2022年度の排出量については、算定完了後速やかに当社ホームページに開示いたします。

3 【事業等のリスク】

当社グループの事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資家の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項及びリスク対策は以下の通りであります。なお、文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末において当社グループが判断したものであります。

(1) 建設業界に対する依存度について

当社グループの主たる取引先は建設会社であり、事業環境としては建設業界の事業環境と一体であります。したがって民間建設投資及び公共建設投資の動向が当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(2) 与信管理について

当社グループでは取引先の信用度合による与信限度枠を設定し、不良債権の発生防止に努めておりますが、取引先の倒産により貸倒損失が発生した場合には、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(3) 事故等による影響について

当社グループでは作業に従事する建設作業所や資機材の補修及び修理工場において、安全・防災・環境管理部のもと社員や協力会社の作業員に対して安全衛生管理の徹底、啓蒙活動を行っておりますが、予期せぬ事故による納入遅延や工期の遅れ等により、損失補償の責任を負う可能性があり、その場合には、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(4) 価格変動の影響について

当社グループの取扱商品であるH形鋼、鋼矢板、鋼製山留、覆工板及び鋼板等の販売価格は市況価格や原材料である鋼材価格の変動の影響を受けます。コスト削減策や販売価格への転嫁等の取り組みを行っておりますが、販売価格が低迷した場合、鋼材価格が高騰した場合及びこれらの施策が想定通りに進まなかった場合には、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(5) 金利変動の影響について

当社グループにおける事業活動への投資資金の一部は金融機関からの借入金を原資としており、金利の変動がある場合には、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(6) 株価の変動について

当社グループが保有している上場株式の株価が変動した場合には、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(7) 固定資産の価値下落について

当社グループが所有する固定資産について、収益性の低下や時価の下落に伴う資産価値の低下により、固定資産の減損処理を行う必要が生じる等、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(8) 退職給付債務について

当社グループの従業員退職給付費用及び債務は、割引率等数理計算上で設定される前提条件や年金資産の期待運用収益率に基づいて算出されております。実際の結果が前提条件と異なる場合には、その影響は累積され、将来にわたって定期的に認識されるため、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(9) 自然災害による影響について

地震や台風などによる大規模な自然災害や、その他の予期せぬ事態が発生した場合には、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(10) カントリーリスクについて

海外への投資、海外顧客との取引については、対象国の政治・経済情勢等が大きく変動する場合には、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(11) 為替レートの変動について

外国通貨での取引については、為替レートが変動した場合には、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(12) 経済環境の激変による影響について

金融恐慌、新型コロナウイルス等の感染症の拡大等、世界規模で経済環境が大きく変動する事象が発生した場合には、建設投資需要が大幅に落ち込む等により、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(13) 情報セキュリティについて

当社グループの有する顧客、取引先及び当社グループの機密情報や個人情報は、情報管理の諸規定を制定することによりグループ全体で徹底した管理を実行しておりますが、過失や盗難、外部からの攻撃等により当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(14) 親会社との関係について

J F Eホールディングス㈱及びJ F Eスチール㈱は当社の親会社であります。当社が取扱う建設仮設材の一部は、J F Eホールディングス㈱の傘下のグループ会社で構成されるJ F Eグループから調達しております。従って、同グループの当社グループに対する事業戦略等に変更が生じた場合には、取引の増減等により、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(15) 法的規制について

当社グループの事業のうち、重仮設事業は、建設業法に定められた一般建設業や特定建設業の許可を受けており、取引を行う場合には必須事項となっております。これらの許可の取消や停止事由が発生した場合、又は当該法規制の改廃や新たな法規制が設けられた場合等には、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(16) 企業買収、組織再編等について

当社グループは、自社の成長をより加速するため、また当社グループの既存並びに新規の事業を補完・強化するために、必要に応じて企業や事業の買収、組織再編等を行っております。

当該行為に際しては、入念な調査、分析、検討を行っておりますが、買収、組織再編時点では想定できなかった収益性の低下等の不測の事態が生じる場合や、グループ会社間におけるシナジーが当初想定したほど発揮されない場合等には、のれんに係る減損損失の発生等により、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

これらのリスクに対するリスク管理体制を「第4 提出会社の状況 4 コーポレート・ガバナンスの状況等」に記載の通り整備し、リスクマネジメント活動を行っているほか、リスク発生の可能性を認識した時点で、発生の回避及び発生した場合の対応に努めてまいります。

4 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末において当社グループが判断したものであります。

(1) 当期の財政状態の状況

当連結会計年度末の総資産については、㈱オトワコーエイの株式取得等により固定資産が3,468百万円増加したことに加え、棚卸資産が1,783百万円増加、電子記録債権が1,670百万円増加したことに對し、預け金を5,800百万円取り崩した事等により前連結会計年度末に比べ1,233百万円(1.1%)増加し、108,980百万円となりました。負債は、仕入債務が1,014百万円増加した事等により前連結会計年度末に比べ1,558百万円(3.2%)増加し、49,876百万円となりました。純資産は、親会社株主に帰属する当期純利益3,428百万円を計上した一方で、自己株式の取得2,291百万円を実施したことと、剰余金の配当1,274百万円(1株あたり前期末配当20円、中間配当15円)の支払いを実施したこと等により前連結会計年度末に比べ325百万円(0.5%)減少し、59,104百万円となりました。

セグメント別の概況は以下のとおりです。

重仮設事業の当連結会計年度末におけるセグメント資産は、㈱オトワコーエイの株式取得等により固定資産が3,513百万円増加したことに加え、棚卸資産が1,775百万円増加、電子記録債権が1,447百万円増加したことに對し、預け金を5,800百万円取り崩した事等により前連結会計年度末に比べ789百万円(0.8%)増加し、99,109百万円となりました。建設機械事業の当連結会計年度末におけるセグメント資産は、預け金が410百万円増加した事等により前連結会計年度末に比べ736百万円(6.8%)増加し、11,586百万円となりました。

(2) 経営成績の状況

事業全体及びセグメント情報に記載された区分ごとの状況

当連結会計年度(2022年度)におけるわが国経済は、新型コロナウイルス感染症からの経済社会活動正常化が進み、緩やかに持ち直したものの、諸物価高騰が収束する見込みは立っておらず、また世界経済は欧米、中国ともに景気後退懸念が払拭されていないことから、今後も景気の先行きは不透明であると考えます。

当社グループの属する建設業界におきましては、公共投資や大型再開発物件は底堅く推移したものの、民間建築分野では資材価格高騰等による着工先送りや採算悪化の傾向が続き、厳しい状況となりました。

このような経営環境の中、当社グループでは採算性改善を最重点課題に掲げ、価格適正化をはじめ総合的付加価値向上に取り組み、収益の確保に注力いたしました。しかし当連結会計年度におきましては、売上高は120,521百万円(前年同期比5.7%増)となったものの、営業利益4,503百万円(前年同期比4.3%減)、経常利益4,903百万円(前年同期比6.4%減)となりました。なお、親会社株主に帰属する当期純利益は、特別利益として政策保有株式の一部を売却したことによる投資有価証券売却益を計上したこと等から、3,428百万円(前年同期比3.1%増)となりました。

セグメント別の概況は以下のとおりです。

(重仮設事業)

重仮設事業におきましては、コストアップ分の価格転嫁と、材料と工事の一括受注を基本とする総合的付加価値向上に重点を置きました。特に工事においては、生産性向上とGHGガス削減に効果を有する新機種(LRB)の導入、子会社化した㈱オトワコーエイとの連携等により、事業領域を拡大しました。また、橋梁インフラメンテナンス事業の中核商品となるH型鋼橋梁GHBを開発・商品化し、今後の展開に道筋をつけました。

以上の施策等により、売上高は108,744百万円(前年同期比4.0%増)となったものの、価格適正化が十分に進まなかったことと、活動水準の回復による販管費の増加、子会社取得に伴う一時的費用増等により、経常利益は4,844百万円(前年同期比5.0%減)と減益となりました。

(建設機械事業)

建設機械事業におきましては、2022年4月に旧子会社5社を統合した新会社を発足させ、統合効果の早期発現に向けた取り組みを進めました。その結果、売上高は14,254百万円(前年同期比4.1%増)となったものの、競争激化に加え、退職給付会計の適用基準変更等により、経常利益は206百万円(前年同期比40.7%減)となりました。

生産、受注及び販売の実績

a. 生産実績

重仮設事業における工場の主たる業務である、建設仮設材の復元修理作業ならびに鋼製山留材等の建設仮設材及び各種製品の製作加工について記載しております。

なお、建設機械事業は、生産に該当する事項はありません。

当連結会計年度の製作加工及び修理実績を販売価格により示せば次のとおりであります。

区分		当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	前年同期比(%)
製作・加工	建設仮設材(百万円)	1,724	18.1
	製品(百万円)	9,266	6.2
	小計(百万円)	10,990	7.9
修理	建設仮設材(百万円)	1,580	4.1
合計(百万円)		12,569	6.2

b. 受注状況

当社グループが取り扱う主要な商製品等については、出荷直前に取引契約の締結を行うという業界の慣習、取引形態の特殊性により、受注高の集計を行っておりません。

c. 売上実績

当連結会計年度の売上実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	前年同期比(%)
重仮設(百万円)	108,744	4.0
建設機械(百万円)	14,254	4.1
計(百万円)	122,998	4.1
調整額(百万円)(注)1	2,477	
合計(百万円)	120,521	5.7

(注)1 調整額は、セグメント間の内部売上高又は振替高の消去額であります。

2 前連結会計年度及び当連結会計年度における主な相手先別の売上実績は、当該売上実績の総売上実績に対する割合が10%未満であるため記載を省略しております。

キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度における現金及び現金同等物残高は、前連結会計年度と比べ5,519百万円(53.7%)減少し、4,767百万円となりました。

なお、各キャッシュ・フローの状況は以下のとおりです。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動では、税金等調整前当期純利益が5,102百万円、減価償却費が3,193百万円となった一方、棚卸資産増加による支出が1,796百万円、法人税等の支払額が1,163百万円及び売上債権増加による支出が1,128百万円となったこと等により、2,952百万円の収入(前年同期9,097百万円の収入)となりました。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動では、㈱オトワコーエイ株式取得による支出が2,049百万円、賃貸用建設機械の取得による支出が1,440百万円及び工場の機械装置等の取得による支出が1,164百万円となったこと等により、4,750百万円の支出(前年同期2,610百万円の支出)となりました。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動では、自己株式の取得による支出が2,294百万円、前期末及び当期中間配当金の支払額が1,274百万円となったこと等により、3,728百万円の支出(前年同期3,234百万円の支出)となりました。

資本の財源及び資金の流動性に係る情報

当社グループの主要な資金需要は、建設仮設材及び賃貸用建設機械の仕入費用、仮設工事の外注費、各種製品の製作加工費等営業活動に伴う支出ならびに設備投資に伴う支出であります。また、2021年4月に策定した中期経営計画に基づき、事業領域の拡大及び先端技術の導入等に対する投資を推進しています。

必要資金の大半は営業収入により確保し、事業拡大のために増額する投資資金及び一時的に不足する運転資金については金融機関からの借入により調達しています。また、当社及び連結子会社において資金の融通を行い、効率的な資金活用を進めるとともに、資金回収にも十分に留意しています。

重要な会計方針及び見積り

当社の財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる会計基準に基づき作成されております。この財務諸表の作成にあたり、見積りが必要な事項につきましては、一定の会計基準の範囲内にて合理的な基準に基づき、会計上の見積りを行っております。

詳細につきましては、「第一部 企業情報 第5 経理の状況」に記載しております。

また、新型コロナウイルスの感染拡大の影響に関する会計上の見積りについて、「第一部 企業情報 第5 経理の状況 追加情報」に記載の通りです。

5 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

6 【研究開発活動】

顧客ニーズに対応したソリューション開発を推進し、『ジェコスグループ10年VISION』の達成に向けた業界トップレベルの技術基盤の確立を目指し、積極的に研究開発を行っております。研究開発の基本方針は以下に掲げるとおりであります。

1．重仮設技術の更なる進化

大規模化、高度化、複雑化する重仮設計画に適合するため、業界トップレベルの商品ラインナップを整えるとともに、様々な環境に適応可能な施工技術開発を進め、地下工事一式受注に向けた体制を強化します。

また、リユース商品の拡充等により、資源循環型経済の実現への貢献を目指します。

2．持続可能な事業体制への変革

人口減少社会に適合するため、製品の製造プロセスを中心とした機械化・自動化、ICT活用を進め、サステナブルな事業推進体制を強化します。

3．新たな挑戦

本格的なインフラ更新時代に適合するため、従来の重仮設の枠組みを超えた技術開発を進め、インフラメンテナンスサービスに向けた体制を強化します。

上記方針の下、当連結会計年度において取り組んだ技術開発テーマは4件であり、研究開発費の総額は43百万円となりました。

なお、当連結会計年度における研究開発活動の主な取り組み及び成果は以下のとおりであります。

本設H形橋梁「GHB」を発表、中小規模橋梁の架け替えニーズに対応

- ・主桁及び横桁に大型圧延H形鋼を採用したシンプルな構造
 - ・軽量化による、既設下部工への負担軽減、耐震性能向上
 - ・設計標準化による、迅速な設計への対応、工期・費用の縮減
- 回転杭を用いた仮橋構造の開発による環境負荷低減（使用鋼材量低減、施工実績2現場）

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当社グループにおける設備には、賃貸用資産としての賃貸用建設機械と事業所等の設備である一般の社用資産とがあり、費用対効果を十分比較検討のうえ各種の更新投資等を実施しております。

当連結会計年度における設備投資等の総額(取得価額ベース、無形固定資産含む)は3,375百万円であり、セグメントごとの設備投資等については、次のとおりであります。

重仮設事業においては、当社の工場設備の更新投資を中心に有形固定資産977百万円、業務効率化を目的としたシステム投資等を中心に無形固定資産187百万円の設備投資を実施しております。

建設機械事業においては、賃貸用建設機械等に2,234百万円の設備投資を実施しております。

また、当連結会計年度においては、営業能力に重要な影響を及ぼすような設備の売却、撤去等はありません。

2 【主要な設備の状況】

当連結会計年度末(2023年3月31日)における当社グループの主要な設備(賃貸を目的とするものを除く)は、以下のとおりであります。

なお、帳簿価額には、建設仮勘定を含んでおりません。

(1) 提出会社

事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (名)	
			建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	土地 (面積千㎡)	リース資産	その他		合計
本社 (東京都中央区)	重仮設	一般管理及び販売用設備	12	150	-	-	15	177	350
名古屋支店 (名古屋市中村区) ほか東日本地域 7支店5営業所 3	重仮設	販売用設備	3	-	-	-	9	12	132
大阪営業部 (大阪市福島区) ほか西日本地域 4支店5営業所 3	重仮設	販売用設備	37	-	-	-	9	46	147
東京工場 (千葉県白井市) ほか東日本地域 5工場1機械セン ター 3	重仮設	建設仮設材の修理、工事用機械の整備、加工用設備	1,999	1,099	5,603 (246) [136]	-	54	8,755	84
大阪工場 (大阪市西淀川区) ほか西日本地域 4工場 3	重仮設	建設仮設材の修理、加工用設備	669	358	6,622 (187)	-	33	7,682	39
社宅、保養所等	重仮設	福利厚生用等の設備	6	-	159 (2)	-	-	166	-
計			2,727	1,607	12,384 (436) [136]	-	120	16,838	752

(2) 国内子会社

会社名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)						従業員数 (名)
			建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	土地 (面積千㎡)	リース資産	その他	合計	
レンタルシステム(株) (東京都中央区)	建設機械	建設機械の整備、販売用設備	855	38	338 (15)	-	32	1,263	402
(株)オトワコーエイ(静岡県沼津市) ほかその他の子会社3社	重仮設	工事用機械等	21	759	26 (3)	-	19	825	194
計			876	797	364 (18)	-	50	2,088	596

(3) 在外子会社

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

- (注) 1 土地の[]書きは、賃借している土地の面積(外書き)を示しております。
2 連結会社以外からの主要な賃借設備の内容は以下のとおりであります。

(提出会社)

事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	土地の面積(千㎡)	年間賃借料(百万円)
本社 (東京都中央区)	重仮設	事務所の建物	-	152
東京工場 (千葉県白井市)	重仮設	工場の土地	100	115
名古屋工場 (愛知県半田市)	重仮設	工場の土地、建物	36	78

- 3 提出会社の事業所及び国内子会社の内訳として以下を含んでおります。

(提出会社)

地域	事業所区分	事業所名 (所在地)
東日本地域	支店	北海道(北海道札幌市)、東北(宮城県仙台市)、水戸(茨城県水戸市)、北関東(埼玉県さいたま市)、千葉(千葉県千葉市)、横浜(神奈川県横浜市)、新潟(新潟県新潟市)
	営業所	旭川(北海道旭川市)、帯広(北海道帯広市)、いわき(福島県いわき市)、蘇我(千葉県千葉市)、北陸(石川県金沢市)
	工場	北海道(北海道千歳市)、仙台(宮城県黒川郡)、長沼(千葉県千葉市)、日本海(新潟県新潟市)、名古屋(愛知県半田市)
	機械センター	富里(千葉県富里市)
西日本地域	支店	広島(広島県広島市)、四国(香川県高松市)、九州(福岡県福岡市)、南九州(鹿児島県鹿児島市)
	営業所	岡山(岡山県岡山市)、福山(広島県福山市)、松山(愛媛県松山市)、熊本(熊本県熊本市)、沖縄(沖縄県那覇市)
	工場	中国(広島県三次市)、四国(香川県綾歌郡)、福岡(福岡県粕屋郡)、鹿児島(鹿児島県鹿児島市)

(国内子会社)

事業種別	セグメントの名称	会社名 (所在地)
その他の子会社	重仮設	ジェコス設計㈱(東京都中央区)、ジェコス工事㈱(東京都中央区)、 トラック・エンド・メンテナンス・サービス㈱(千葉県白井市)

3 【設備の新設、除却等の計画】

当社グループの設備投資については、単年度利益計画において、需要動向、費用対効果を総合的に勘案し設備投資総額を計画しており、重要な案件については総額の枠内で個別に計画しております。

(1) 重要な設備の新設等

該当事項はありません。

(2) 重要な設備の除却等

該当事項はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	97,500,000
計	97,500,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2023年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (2023年6月22日)	上場金融商品取引所名又は登録認可 金融商品取引業協会名	内容
普通株式	33,795,746	33,795,746	東京証券取引所 プライム市場	単元株式数100株
計	33,795,746	33,795,746		

(2) 【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2023年2月8日	2,640	33,796		4,398		4,596

(注) 自己株式の消却による減少であります。

(5) 【所有者別状況】

2023年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満株式の状況(株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(名)		22	23	104	95	13	7,968	8,225	
所有株式数(単元)		41,029	3,010	210,738	17,989	78	64,632	337,476	48,146
所有株式数の割合(%)		12.16	0.89	62.45	5.33	0.02	19.15	100.00	

(注) 1 上記「その他の法人」及び「単元未満株式の状況」には、証券保管振替機構名義の株式がそれぞれ15単元及び9株含まれております。

2 自己株式205株は、「個人その他」に2単元、「単元未満株式の状況」に5株含まれております。

(6) 【大株主の状況】

2023年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
JFEスチール株式会社	東京都千代田区内幸町二丁目2番3号	16,079	47.58
JFE商事株式会社	東京都千代田区大手町一丁目9番5号	2,965	8.77
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町2丁目11番3号	1,880	5.56
ジェコス取引先持株会	東京都中央区日本橋浜町二丁目31番1号	994	2.94
株式会社日本カストディ銀行(信託口)	東京都中央区晴海一丁目8番12号	941	2.78
ジェコス社員持株会	東京都中央区日本橋浜町二丁目31番1号	705	2.09
JFE商事資機材販売株式会社	東京都千代田区大手町二丁目2番1号	523	1.55
JFE商事コイルセンター株式会社	神奈川県横浜市金沢区鳥浜町7番地	511	1.51
株式会社日本カストディ銀行(信託口4)	東京都中央区晴海一丁目8番12号	502	1.49
乗松 真也	東京都江東区	363	1.07
計		25,462	75.34

(注) 1 日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)、株式会社日本カストディ銀行(信託口)、株式会社日本カストディ銀行(信託口4)の所有株式は、信託業務に係るものであります。

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

2023年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 200		
完全議決権株式(その他)	普通株式 33,747,400	337,474	
単元未満株式	普通株式 48,146		1単元(100株)未満の株式
発行済株式総数	33,795,746		
総株主の議決権		337,474	

(注) 1 「完全議決権株式(自己株式等)」欄は、全て当社保有の自己株式であります。

2 「完全議決権株式(その他)」欄の普通株式及び「単元未満株式」欄の普通株式には、証券保管振替機構名義の株式が、それぞれ1,500株(議決権15個)及び9株含まれております。

【自己株式等】

2023年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
ジェコス株式会社	東京都中央区日本橋浜町 二丁目31番1号	200		200	0
計		200		200	0

(注) 上記「自己株式等」は、全て当社保有の自己株式であります。

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】

会社法第155条第3号及び会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

区分	株式数(株)	価額の総額(百万円)
取締役会(2023年1月31日)での決議状況 (取得日2023年2月1日)	2,600,000	2,291
当事業年度前における取得自己株式		
当事業年度における取得自己株式	2,600,000	2,291
残存決議株式の総数及び価額の総額		
当事業年度の末日現在の未行使割合(%)		
当期間における取得自己株式		
提出日現在の未行使割合		

(注) 東京証券取引所における自己株式立会外買付取引(ToSTNeT-3)による取得であります。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(百万円)
当事業年度における取得自己株式	490	0
当期間における取得自己株式	61	0

(注) 当期間における取得自己株式には、2023年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額 (百万円)	株式数(株)	処分価額の総額 (百万円)
引き受ける者の募集を行った 取得自己株式				
消却の処分を行った取得自己株式	2,640,379	2,315		
合併、株式交換、株式交付、 会社分割に係る移転を行った 取得自己株式				
その他()				
保有自己株式数	205		266	

(注) 当期間における保有自己株式には、2023年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

3 【配当政策】

(利益配分に関する基本方針及び当期の配当決定にあたっての考え方)

当社は、株主に対する利益還元を経営の重点課題として位置付けており、2021年4月23日に発表いたしました中期経営計画(2021～2024年度)においても、配当性向(連結)は30%程度を維持することを目標としております。

以上の方針に基づき、当期の配当につきましては、普通配当1株当たり年間35円(うち中間配当15円)といたしました。

(内部留保資金の使途)

内部留保資金につきましては、保有資機材や生産設備等の経営基盤の強化・拡充及び事業領域拡大や技術開発の原資に充てることで、業績及び財務体質の維持・向上を図り、株主に対する利益還元に資する考えであります。

(配当の決定機関及び当事業年度に係る剰余金の配当に関する事項)

当社は、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことを基本方針としており、剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会であります。また、当社は取締役会の決議によって会社法第454条第5項の規定による剰余金の配当(中間配当)をすることができる旨を定款に定めております。なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

(決議)	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額(円)
2022年10月27日 取締役会	546	15
2023年6月22日 定時株主総会	676	20

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、企業の社会的な責任が一層その重要性を増しているなか、経営の透明性・健全性・コンプライアンスを確保した活動を通じて社会に貢献するとともに、持続的な成長及び中長期的な企業価値の向上を目的とした内部統制を確立することがコーポレート・ガバナンスの基本と考えております。

当社は、この基本的な考え方に基づき、各ステークホルダーへの説明責任を重視し、適切な情報開示を行い信頼関係の構築に努めるとともに、監査機能の独立性を確保するなど、コーポレート・ガバナンスの強化に取り組んでまいります。

企業統治の体制

(内部統制体制構築の基本方針)

当社の企業理念、グループ行動憲章ならびに定款、取締役会規程等をはじめとする、業務遂行に関わるすべての規範、規程、規則、指針、運用細則等(以下「諸規程・規則」)は包括的の一体として、当社の内部統制体制を構成するものである。従い、当取締役会として、諸規程・規則が遵守されるよう図るとともに、企業活動に関わる法令変更あるいは社会環境の変化に従い、更に業務の効率性の観点において、当社の体制及び諸規程・規則について適宜の見直し、修正が行われることにより、上記法令の目的・趣旨が実現されるよう努めるものとする。

a 会社法第362条第4項第6号及び会社法施行規則第100条第1項各号に掲げる体制

(a) 取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

- ア 重要事項は取締役会において審議をすることとし、業務執行は代表取締役社長のもと、職務権限規程その他関係諸規程に則り、各業務担当執行役員がこれに当たるものとする。
- イ サステナビリティ委員会を設置し、内部統制システム構築に向け継続の見直し及び整備を行うとともに、同委員会内に設置する意識・活動定着部会を中心に倫理ホットラインの適正な運用を図る。
- ウ 監査部により法令、規程等に則っているかの適正性の監査を行う。
- エ 関係法令の改正等に対しては、各執行部門において適宜検証し、必要に応じ社内規程を改正するとともに、継続的に見直しをするほか、コンプライアンス等について社内教育を行う。

(b) 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

- ア 毎月定例的に開催する取締役会において重要事項を決定するほか各取締役の業務の執行状況について報告するとともに、必要に応じて経営会議等会議体の審議を経て、職務権限規程等に則り決定する。
- イ 取締役会等の会議体の審議の充実を図る。
- ウ 取締役会規程、職務権限規程、稟議規程等業務執行、意思決定に係わる社内規程を継続的に整備し、効率的業務の執行がなされるよう図る。
- エ 重要事項について取締役会その他で意思決定をする際には、関係する執行部門の意見を聴取するほか必要かつ適切な情報が提供されるよう図る。

(c) 取締役の職務の執行に係わる情報の保存及び管理に関する体制

- ア 取締役会議事録を作成するとともに、意思決定、職務の執行に係わる情報は、稟議規程、J F E グループ文書管理規程に則り、検索可能な状態で適正に保存、管理する。
- イ 職務の執行上取扱う情報等は、J F E グループ秘密情報管理規程、個人情報管理規程及びJ F E グループ情報セキュリティ管理規程のほか、関連諸規程に則り適正に管理する。

(d) 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

- ア 業務執行上のリスクに関しては、業務担当執行役員の指示のもと継続的にその把握と対応に努めることとしており、重要事項に関しては必要に応じて関連諸規程に従い取締役会等において審議検討することとする。
- イ 上記アのほかサステナビリティ委員会と同委員会内に設置する人事労働部会、安全・防災・環境・BCP部会、内部統制・コンプライアンス部会、グループ環境部会、意識・活動定着部会等により全社横断的にリスクの把握に努める。
- ウ 情報開示体制を整備し、適正な情報開示に努める。
- エ 災害、事故等のリスクに関してはリスク管理規程を制定しリスク管理体制の充実を図る。

(e) 当社ならびにその親会社及び子会社からなる企業集団における業務の適正を確保するための体制

- ア 当社は、JFEホールディングス株式会社及びJFEスチール株式会社の子会社であり、親会社が保持するJFEグループとしての、倫理法令遵守、リスク管理、財務報告・情報開示などの体制のなかに、当社及び当社傘下のグループ会社の体制が組み込まれることにより、企業集団としての体制が構築されている。当社は、当社及び当社傘下のグループ会社から形成する企業グループ全体として内部統制体制を構築する。
- イ 当社は、グループ経営に関する重要事項ならびに当社傘下のグループ会社の重要事項(損失の危険の管理に関する事項を含む)について、当社取締役会規程や当社が定める国内関係会社管理規程・海外関係会社管理規程等により決定手続等を定め、適切な会議体において審議・決定し、又は報告を受ける。
- ウ 当社は、親会社が設置するグループ・コンプライアンス委員会のもと、サステナビリティ委員会を設置し、当社及び傘下のグループ会社の倫理法令遵守に関する基本方針及び重要事項の審議・決定を行い、施策の実施状況を監督するとともに、親会社のグループ・コンプライアンス委員会と連携し、倫理法令遵守の経営を推進する。当社傘下のグループ会社は、会社の規模、事業の性質、機関の設計、その他会社の個性及び性質を踏まえ、必要な倫理法令遵守体制を整備する。
- エ 当社は、倫理ホットラインについて、当社及び当社傘下のグループ会社を含むグループ全体の倫理法令遵守に関する重要な情報が現場から経営トップに直接伝わる制度として、当社の使用人のほか当社傘下のグループ会社の使用人等も利用者として整備し、適切に運用する。
- オ 当社の内部監査部門は、親会社の内部監査部門と連携し、当社及び当社傘下のグループ会社の業務の有効性・効率性ならびに法令及び定款の遵守状況について監査する。
- カ 当社及び当社傘下のグループ会社は、財務報告の信頼性を確保するために必要な体制、適時適切な情報開示のために必要な体制を整備する。

b 会社法施行規則第100条第3項各号に掲げる体制

- (a) 監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項
監査役と事前に協議し、使用人を配置する。
- (b) 監査役の職務を補助する使用人の取締役からの独立性に関する事項
監査役室の使用人人事に関しては監査役と協議する。
- (c) 監査役の職務を補助する使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項
当該使用人は、監査役の指揮命令下で監査役監査に関する業務を行う。

(d) 監査役への報告に関する体制

- ア 取締役、執行役員及び使用人は取締役会ほかの重要会議の開催を監査役に通知し、監査役はそれら重要な会議に出席し報告を受けることができるものとする。
- イ 取締役、執行役員及び使用人は必要に応じ又は監査役会、監査役の要請に応じ、監査役会、監査役に対して職務の執行状況(当社及び当社傘下のグループ会社に関する重要事項を含む)を報告する。当社傘下のグループ会社の取締役、執行役員及び使用人は、必要に応じ又は監査役会、監査役の要請に応じ、監査役会、監査役に対して職務の執行状況を報告する。
- ウ 当社は、倫理ホットラインについて、監査役に対して直接通報又は相談を行うことができる制度として整備する。また、倫理ホットライン事務局等が受けた通報又は相談された法令違反行為等については、監査役に対して、その都度内容を報告する。

(e) 監査役に報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制

当社は、倫理ホットラインについて、監査役に法令違反行為等を通報又は相談した者及び通報又は相談された法令違反行為等を監査役に報告した者が不利な取り扱いを受けないことを規程に定め適切に運用する。

(f) 監査役職務の執行について生ずる費用の前払又は償還の手続その他の当該職務の執行について生ずる費用又は債務の処理に係る方針に関する事項

当社は、監査役職務執行に必要な費用について請求があった場合、特に不合理なものでなければ前払い又は償還に応じる。

(g) その他監査役監査が実効的に行われることを確保するための体制

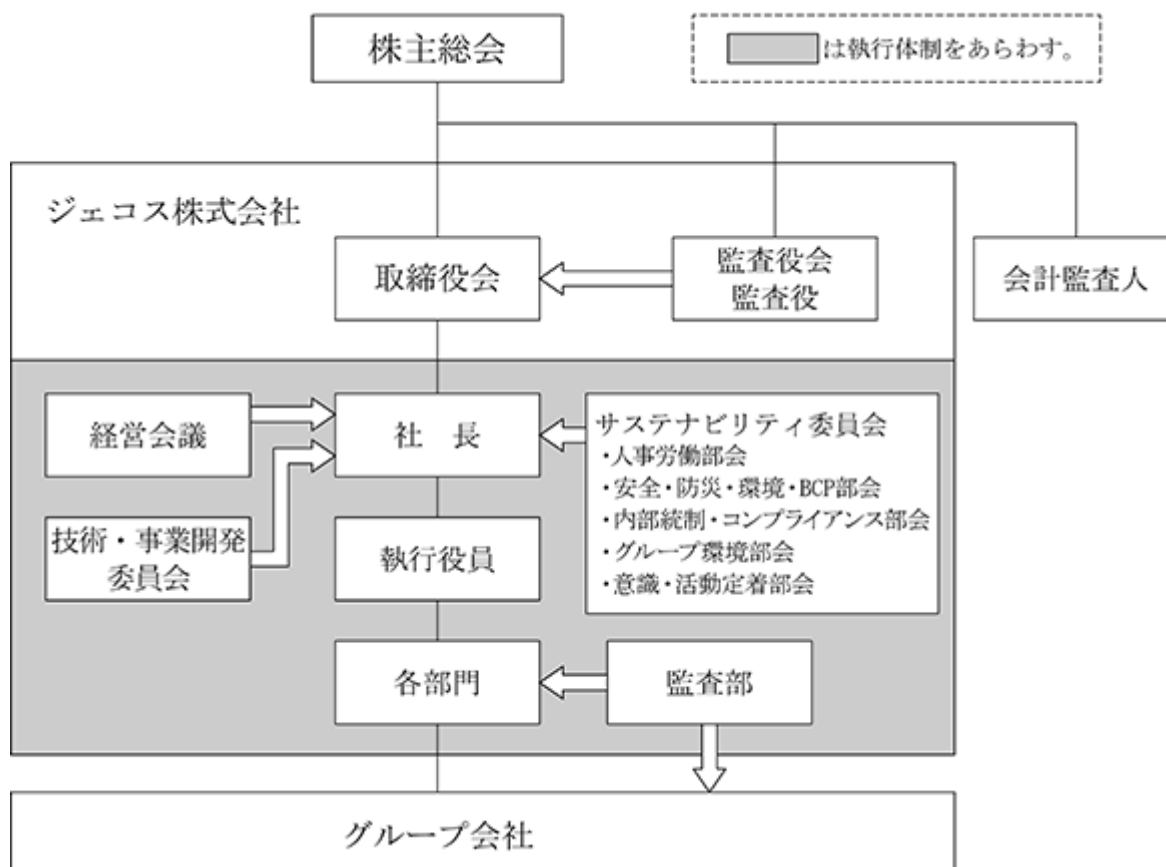
- ア 取締役、執行役員及び使用人は、監査役監査に必要な重要書類の閲覧、実地調査、取締役等との意見交換、当社傘下のグループ会社調査、当社傘下のグループ会社監査役との連携等、監査役活動が円滑に行われるよう監査環境の整備に協力する。
- イ 監査役は、会計監査人、内部監査部署の監査結果(当社又は当社傘下のグループ会社の重要事項を含む。)について適宜報告を受け、それぞれと緊密な連携を図る。

・企業統治の体制の概要

当社は監査役会設置会社であり、取締役6名(うち社外取締役2名)、監査役4名(うち社外監査役2名)を選任しております。

企業統治の体制は以下のとおりであります。

【企業統治体制の模式図】



「取締役会」

経営の基本方針に関する事項や会社経営の執行に関する重要な事項の決定、報告事項に基づく業務執行の監督を行っております。

取締役は、毎月定例的に開催される取締役会において、業務執行の状況を報告しております。

取締役会の意思決定、取締役の業務執行等については、各監査役が取締役会等に出席するほか、必要に応じてヒアリングを行うなど、監査を行っております。

「経営会議」

社長を議長とし、議長が選任した執行役員等によって構成され、経営の基本方針、事業計画、重要な設備投資、投融資等に関して審議を行っております。

「サステナビリティ委員会」

委員長である社長を中心に、人事労働部会、安全・防災・環境・BCP部会、内部統制・コンプライアンス部会、グループ環境部会、意識・活動定着部会で構成され、サステナビリティ全般の事項について、全社的に推進を図っております。

「技術・事業開発委員会」

社長を委員長として、技術開発に関する主管部署が立案した技術・事業開発計画について審議を行い、技術面からの経営課題の解決を推進しております。

各部門の業務執行については、独立部署である監査部により定期的に監査を行っております。

機関ごとの構成員は次のとおりであります。

	議長・委員長	構成員
取締役会	野房 喜幸 (代表取締役社長)	岩本 能成、石澤 毅、彦坂 良治、清宮 理(社外取締役)、 浅野 幹雄(社外取締役)
経営会議	野房 喜幸 (代表取締役社長)	岩本 能成、松井 智幸、金子 勝幸、石澤 毅、川森 陽一、 彦坂 良治
サステナビリティ 委員会	野房 喜幸 (代表取締役社長)	岩本 能成、石澤 毅、彦坂 良治、井澤 信之、 野神 光弘(社外監査役)、山内 宏和
技術・事業開発 委員会	野房 喜幸 (代表取締役社長)	岩本 能成、松井 智幸、金子 勝幸、石澤 毅、川森 陽一、 宮島 敏彰、岩崎 伸一、彦坂 良治、出山 勝弘、 佐伯 耕一、清宮 理(社外取締役)

・企業統治の体制を採用する理由

当社は、公正で透明性の高い経営の実現と、効率的な事業運営を行うとともに持続的な成長及び中長期的な企業価値の向上を目指して、監査役制度を採用しております。また、コーポレート・ガバナンスのより一層の強化を図る目的から社外取締役を選任し、取締役の任期を1年としております。社外取締役2名を含む6名から構成される取締役会が、業務執行に対する適切な監督機能を発揮するとともに、社外監査役2名を含む4名から構成される監査役会が経営を監視し、会計監査人を含めた三者によりガバナンス体制の強化に万全を期しております。

なお、当社は執行役員制度を採用しており、経営の意思決定及び業務監督機能と業務執行機能を分離し、経営に対する権限と責任の明確化を図っております。

・内部統制システムの整備の状況

内部統制システムの整備の状況といたしましては、各部門間の業務執行に関し相互牽制が働くよう、社内諸規程を定めるなど監視体制を整備しており、主なものは以下のとおりであります。

- a 申請部署の部長による経費等の支払承認の後、財務部による支払手続を実施することで、不正を未然に防止する仕組みが確立されております。
- b 営業部門から独立した事務管理部において、売上債権、仕入債務の管理を実施することで、誤計上や債権回収遅延を防止する仕組みが確立されております。
- c 財務部により、取引先の信用度合に応じた与信限度を設定することで、貸倒損失の発生を極少化する仕組みが確立されております。

・リスク管理体制の整備の状況

当社は、企業の継続において内部統制体制の充実が最重要課題であると位置付けており、その一環として、リスク管理規程を制定し、経営危機発生時における対応等を定めているほか、サステナビリティ委員会を設置し、内部統制制度、コンプライアンス体制等の強化を図っております。加えて、特に災害等のリスクに対しては、総務部及び安全・防災・環境管理部を中心に災害発生時の対応や連絡網の整備など、危機管理体制の充実を図っております。

・子会社の業務の適正を確保するための体制整備の状況

当社は、取締役会規程、国内関係会社管理規程及び海外関係会社管理規程等に則り、子会社の業務執行における一定の重要事項について当社取締役会での機関決定手続を定め、承認又は報告を求めるとともに、子会社各社に対し定期的に内部監査を実施しております。また、当社役職員を子会社の取締役や監査役に派遣することで、子会社における統制状況をモニタリングしております。

・取締役会の活動状況

当期は、取締役会を15回開催しており、個々の取締役の出席状況は下表のとおりであります。また、取締役会における主要な取り組み事項は、中期経営計画の進捗状況のフォローや方向性について、グループ経営やM&A案件について、またサステナビリティやリスクマネジメント上の諸課題等についての議論及び意思決定となっております。

氏名	役職名	開催回数	出席回数
野房 喜幸	代表取締役社長	15回	14回
鈴木 章夫	代表取締役	15回	14回
藤田 眞	取締役	3回	3回
岩本 能成	取締役	3回	3回
松井 智幸	取締役	3回	2回
石澤 毅	取締役	12回	12回
彦坂 良治	取締役	12回	12回
清宮 理	取締役 (社外取締役)	15回	15回
浅野 幹雄	取締役 (社外取締役)	15回	15回

(注) 取締役藤田眞氏、岩本能成氏及び松井智幸氏の開催回数及び出席回数は、2022年6月23日退任以前に開催された取締役会を対象とし、取締役石澤毅氏及び彦坂良治氏の開催回数及び出席回数は、2022年6月23日就任以降に開催された取締役会を対象としています。

・責任限定契約の内容の概要

当社は、取締役(業務執行取締役等であるものを除く。)及び監査役と、会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく賠償責任の限度額は、法令が規定する額としております。

・役員等賠償責任保険契約の内容の概要

当社は、当社の取締役、監査役、執行役員及び重要な使用人を被保険者とした役員等賠償責任保険契約を保険会社との間で締結(保険料は全額当社負担)し、被保険者がその業務の遂行に伴う行為に起因して負担することになる損害賠償金及び争訟費用等を補填することとしております。

取締役の定数

当社の取締役は11名以内とする旨定款に定めております。

取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席してその議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。

また、取締役の選任決議は、累積投票によらないものとする旨定款に定めております。

株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。これは、特別決議事項の審議を機動的に行えるようにするものであります。

中間配当

当社は、株主への機動的な利益還元を行うため、会社法第454条第5項の規定により、取締役会の決議によって毎年9月30日を基準日として、中間配当を行うことができる旨定款に定めております。

自己株式取得の決定機関

当社は、会社法第165条第2項の規定により、取締役会決議によって自己株式を取得することができる旨定款に定めております。これは、機動的な資本政策を遂行できるようにするためであります。

取締役及び監査役の実任免除

当社は、会社法第426条第1項の規定により、任務を怠ったことによる取締役(取締役であった者を含む。)及び監査役(監査役であった者を含む。)の損害賠償責任を、法令の限度において、取締役会の決議によって免除することができる旨定款に定めております。これは、取締役及び監査役が職務を遂行するにあたり、その能力を十分に発揮して、期待される役割を果たし得る環境を整備することを目的とするものであります。

(2) 【役員の状況】

役員一覧

男性9名 女性1名 (役員のうち女性の比率10.0%)

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数
代表取締役 社長	野 房 喜 幸	1963年 3月22日生	1985年 4月 2001年 9月 2003年 4月 2005年 8月 2006年 4月 2009年 4月 2010年 4月 2011年 4月 2016年 4月 2019年 4月 2021年 4月 2021年 6月	川崎製鉄㈱入社 同社総務部秘書室長 J F E スチール㈱総務部秘書室長 J F E ホールディングス㈱総務部秘書室長 J F E スチール㈱輸出営業部薄板輸出室長 同社営業総括部輸出総括室長 同社経営企画部海外事業総括室長主任部員 同社経営企画部海外事業総括室長 同社常務執行役員 同社専務執行役員 当社常勤顧問 当社代表取締役社長(現任)	(注) 3	5,300株
代表取締役	岩 本 能 成	1959年 1月31日生	1982年 4月 2002年 4月 2010年 4月 2010年 6月 2012年 3月 2012年 4月 2014年 4月 2015年 6月 2018年 4月 2022年 6月 2023年 6月	当社入社 当社第 4 営業本部第 1 営業部長 当社東京営業本部長、兼日本海営業本部長 当社取締役 当社取締役退任 当社執行役員 当社常務執行役員 当社取締役 常務執行役員 当社取締役 専務執行役員 当社専務執行役員 当社代表取締役 専務執行役員(現任)	(注) 3	14,425株
取締役	石 澤 毅	1965年 1月18日生	1989年 4月 2008年 4月 2011年 7月 2014年 4月 2016年 4月 2019年 4月 2020年 4月 2022年 4月 2022年 6月	川崎製鉄㈱入社 J F E スチール㈱東日本製鉄所(千葉地区)設備部土木・建築室長 同社東日本製鉄所商品技術部建材加工室長 同社建材センター建材開発部土木技術室長 同社建材センター建材開発部長 同社建材センター建材技術部長 当社執行役員 当社常務執行役員 当社取締役 常務執行役員(現任)	(注) 3	500株
取締役	彦 坂 良 治	1967年11月 3日生	1990年 4月 2007年 1月 2008年 5月 2013年 4月 2016年 4月 2019年 4月 2022年 4月 2022年 6月	川崎製鉄㈱入社 J F E ホールディングス㈱財務・I R 部主任部員 J F E スチール㈱第 2 関連企業部主任部員 同社経理部資金室長 J F E ホールディングス㈱財務部財務室長 同社理事、財務部長 当社執行役員 当社取締役 執行役員(現任)	(注) 3	500株
取締役 (非常勤)	清 宮 理	1948年 2月14日生	1973年 4月 1980年 7月 1982年 4月 1988年 4月 1997年 4月 2016年 6月 2018年 4月 2018年 4月	運輸省入省 米国カリフォルニア州立大学留学 運輸省港湾技術研究所構造部沈埋構造研究室長 運輸省港湾技術研究所構造部構造強度研究室長 早稲田大学理工学部土木工学科(現 創造理工学部社会環境工学科)教授 当社社外取締役(非常勤)(現任) 早稲田大学名誉教授(兼任)(現任) 一般財団法人沿岸技術研究センター参与(兼任)(現任)	(注) 3	株
取締役 (非常勤)	浅 野 幹 雄	1952年 7月29日生	1975年 4月 1998年 4月 2001年10月 2003年 6月 2007年 6月 2009年 6月 2011年 6月 2017年 6月 2019年 6月 2020年 6月	豊田通商㈱入社 同社非鉄金属部長 同社リスクマネジメント部長 同社取締役 同社常務取締役 同社専務取締役 同社代表取締役副社長 同社顧問 当社社外取締役(非常勤)(現任) 日東工業㈱社外取締役(監査等委員)(兼任)(現任)	(注) 3	株

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数
監査役	井澤 信之	1961年10月21日生	1985年4月 2008年4月 2009年4月 2011年4月 2014年4月 2015年4月 2016年4月 2017年4月 2017年6月 2022年4月 2022年6月	日本鋼管(株)入社 J F E スチール(株)総務部CSR室長 同社鋼管営業部エネルギー・プラント室長 同社北海道支社長 同社鋼管営業部長 同社鋼管センター鋼管営業部長 J F E 条鋼(株)常務執行役員 日本鑄鉄管(株)常勤顧問 同社取締役 当社顧問 当社監査役(常勤)(現任)	(注) 5	300株
監査役	野神 光弘	1962年12月19日生	1985年7月 2010年4月 2011年10月 2014年4月 2018年4月 2018年6月 2021年6月 2021年6月 2023年6月	日本鋼管(株)入社 J F E スチール(株)厚板・形鋼輸出部厚板・軌条室長 J F E ホールディングス(株)企画部主任部員 J F E スチール(株)経営企画部海外事業総括室主任部員 同社監査役事務局部長 日本鑄造(株)社外監査役 J F E ホールディングス(株)監査役事務局部長 日本鑄鉄管(株)社外監査役 当社社外監査役(常勤)(現任)	(注) 6	株
監査役 (非常勤)	菊池 きよみ	1963年2月2日生	1986年4月 1999年4月 2002年9月 2003年10月 2004年9月 2006年9月 2008年4月 2015年6月 2016年3月 2016年6月 2016年6月	(株)第一勧業銀行(現 (株)みずほ銀行)入行 あさひ法律事務所 アレン・アンド・オーヴェリー法律事務所(ロンドン) あさひ法律事務所 太陽法律事務所(現 ポールヘイスティングス法律事務所・外国法共同事業) J P モルガン証券(株) T M I 総合法律事務所 弁護士(兼任)(現任) 西松建設(株)社外取締役 ニッセイアセットマネジメント(株)社外監査役(兼任)(現任) 当社社外監査役(非常勤)(現任) 西松建設(株)社外取締役(監査等委員)	(注) 4	株
監査役 (非常勤)	山内 宏和	1969年3月12日生	1991年4月 2003年4月 2006年1月 2007年4月 2008年4月 2015年4月 2020年4月 2022年6月 2023年4月 2023年4月	川崎製鉄(株)入社 J F E スチール(株)経理部計画室主任部員 兼新統合システム推進班主任部員 同社西日本製鉄所企画部経理室主任部員 同社建材センター建材営業部建築建材室主任部員 同社形鋼・スパイラルセクター部主任部員 同社製鉄所業務プロセス改革班主任部員 同社監査役事務局主任部員(兼任)(現任) 当社監査役(非常勤)(現任) J F E ウエストテクノロジー(株)監査役(非常勤)(兼任)(現任) J F E プラリソース(株)監査役(非常勤)(兼任)(現任)	(注) 5	株
計						21,025株

- (注) 1 取締役清宮理、浅野幹雄の二氏は、会社法第2条第15号に定める社外取締役であります。
2 監査役野神光弘、菊池きよみの二氏は、会社法第2条第16号に定める社外監査役であります。
3 2023年6月22日選任後、1年以内に終了する事業年度に関する定時株主総会の終結の時まで。
4 2020年6月18日選任後、4年以内に終了する事業年度に関する定時株主総会の終結の時まで。
5 2022年6月23日選任後、4年以内に終了する事業年度に関する定時株主総会の終結の時まで。
6 2023年6月22日選任後、4年以内に終了する事業年度に関する定時株主総会の終結の時まで。

(執行役員の状況)

当社では、経営の意思決定及び業務監督機能と業務執行機能を分離することで、権限と責任の明確化を図り、経営の意思決定と業務執行の迅速化ならびに機動的な業務執行体制を構築するため、執行役員制度を採っております。2023年6月22日現在の執行役員は、以下のとおりであります。

役名	氏名	担当
社長	野 房 喜 幸	C E O
専務執行役員	岩 本 能 成	社長補佐、事務管理部、営業総括部、業務部、安全・防災・環境管理部、工事本部、工場総括部、工場部門、加工・橋梁事業本部の統括
専務執行役員	松 井 智 幸	東部事業本部の担当、兼東部事業本部長
常務執行役員	黒葛原 淳 一	九州事業本部の担当、兼九州事業本部長
常務執行役員	金 子 勝 幸	工事本部の担当、兼工事本部長
常務執行役員	石 澤 毅	技術総括部、第1技術部、第2技術部の担当
常務執行役員	川 森 陽 一	加工・橋梁事業本部、中部事業本部の担当、兼加工・橋梁事業本部長、兼中部事業本部長
常務執行役員	田 村 拳 勝	東北・北海道事業本部の担当、兼東北・北海道事業本部長
執行役員	新 井 紀 明	安全・防災・環境管理部の担当
執行役員	宮 島 敏 彰	事務管理部、営業総括部、業務部の担当
執行役員	岩 崎 伸 一	総務部、人事部、I C T推進部の担当
執行役員	彦 坂 良 治	経営企画部、財務部、監査部の担当
執行役員	内 海 信 武	西部事業本部の担当、兼西部事業本部長
執行役員	出 山 勝 弘	工場総括部、工場部門の担当、兼東京工場長

社外取締役及び社外監査役

当社の社外取締役は2名、社外監査役は2名であります。

当社は、社外取締役及び社外監査役を選任するための当社からの独立性に関する基準又は方針は定めておりませんが、その選任にあたっては、社外取締役及び社外監査役が、当社経営陣から独立した立場で経営監督機能を十分発揮できるよう、会社法に定められる社外取締役・社外監査役の要件や金融商品取引所の独立性基準を踏まえ、一般株主と利益相反の生じるおそれのない、客観的・中立的立場からの監督又は監査及び助言が期待できる人物を選任しております。

社外取締役である清宮理氏は、構造部材及び構造物等の研究に携わり、構造力学について深い学識、建設業界に関する知識と豊富な見識を有しております。同氏は、当社の社外取締役として、取締役会、技術・事業開発委員会において公正かつ客観的な立場から適切な発言を行っており、当社の経営の監督とコーポレート・ガバナンス充実の観点から、社外取締役として選任しております。同氏は当社と直接の利害関係はなく、一般株主との間に利益相反が生じるおそれのないことから、社外取締役に適格であると判断しております。

社外取締役である浅野幹雄氏は、豊田通商株式会社において要職を経て代表取締役副社長執行役員を務め、企業経営に関する知識と豊富な見識を有しております。同氏は、当社の社外取締役として、取締役会において公正かつ客観的な立場から適切な発言を行っており、当社の経営の監督とコーポレート・ガバナンス充実の観点から、社外取締役として選任しております。

同氏は当社と直接の利害関係はなく、一般株主との間に利益相反が生じるおそれがないことから、社外取締役に適格であると判断しております。

同氏は過去に、当社と取引関係のある豊田通商株式会社の業務執行者でありましたが、2017年6月23日に代表取締役副社長執行役員を退任しております。

当社と豊田通商株式会社に直接の資本関係はなく、独立性基準に抵触するような取引関係もないため、同氏の当社における社外取締役としての独立性に影響を及ぼすものではないと考えております。

社外監査役である菊池きよみ氏は、弁護士としての専門的知識と金融機関での勤務など豊富な経験を有しており、当社監査役としての見識、資質を十分に備えているものと考えております。同氏は、当社の社外監査役として、取締役会において公正かつ客観的な立場から発言を適宜行い、監査役会において社外監査役として行った監査の報告をし、毎回他の監査役が行った監査について、必要に応じ意見を述べており、当社の経営の監督とコーポレート・ガバナンス充実の観点から、社外監査役として選任しております。

同氏は当社と直接の利害関係はなく、一般株主とは利益相反が生じるおそれがないことから、社外監査役に適格であると判断しております。

社外監査役である野神光弘氏は、JFEスチール株式会社での豊富な業務経験に加え、JFEホールディングス株式会社の監査役事務局部長や日本鑄造株式会社及び日本鑄鉄管株式会社の社外監査役を務めるなど監査役の職務に精通しており、当社監査役としての見識、資質を十分に備えているものと考えております。

同氏は、当社の社外監査役として、取締役会において公正かつ客観的な立場から適切な意見を期待できるため、当社の経営の監督とコーポレート・ガバナンス充実の観点から社外監査役として選任しております。

また同氏は、2023年6月22日にJFEホールディングス株式会社を退職しており、当社との特別の利害関係はありません。

社外取締役は、取締役会等の重要会議に出席し、取締役等と会社の経営、コーポレート・ガバナンス等について率直な意見交換を行い、これらの活動を通じて業務執行を監督し、社外監査役は、内部監査部門である監査部、その他の監査役及び会計監査人と、定期的又は必要に応じて意見交換を行い情報の共有化を図ることで相互の連携を高めており、内部統制部門は社外監査役の求めに応じて情報を提供する体制をとっております。

(3) 【監査の状況】

監査役監査の状況

監査役会は、監査役4名(うち、社外監査役は2名)で構成され、監査役会を月1回程度開催しており、監査の方針、監査の計画、監査の方法の策定等を行っております。

常勤監査役は、監査方針及び監査計画に基づき、取締役会をはじめとする重要会議に出席するほか、重要書類の適宜閲覧、各部・支店・工場・関連会社への往査等を通じて情報収集及び状況確認等を行うとともに、経営トップへの報告・意見交換を行ったほか、社外取締役とも意見交換を行い情報の共有など連携を図っております。当期は、内部統制体制の整備に係る事項に加え、中期経営計画における事業領域拡大、各部門における課題への取り組み、建機子会社の基盤強化などを重点的に監査致しました。また、各監査役及び会計監査人、監査部は、定期的又は必要に応じて意見交換を行い情報の共有化を図ることで相互の連携を高めており、内部統制部門はこれらの監査の求めに応じて必要な情報を提供する体制をとっております。なお、会計監査人とは2021年3月期から記載が義務付けられた監査上の主要な検討事項(KAM)について、積極的にコミュニケーションを行っております。

当期は、監査役会を14回開催しており、個々の監査役の出席状況は下表のとおりであります。また、監査役会における具体的な検討事項は、監査方針及び監査計画、内部統制体制の整備・運用状況、会計監査人の監査の方法及び結果の相当性、会計監査人の選任及び解任並びに不再任に関する事項、会計監査人に対する報酬等の同意、監査報告書の作成等となっております。

氏名	役職名	開催回数	出席回数
宇田 斉	監査役(常勤)	14回	14回
井澤 信之	監査役(常勤)	11回	11回
倉智 達也	監査役(常勤)	3回	3回
菊池 きよみ	監査役(非常勤)	14回	14回
山内 宏和	監査役(非常勤)	11回	11回
二木 岳彦	監査役(非常勤)	3回	2回

(注) 監査役倉智達也氏及び二木岳彦氏の開催回数及び出席回数は、2022年6月23日辞任以前に開催された監査役会を対象とし、監査役井澤信之氏及び山内宏和氏の開催回数及び出席回数は、2022年6月23日就任以降に開催された監査役会を対象としています。

内部監査の状況

当社の内部監査部門である監査部は、人員4名で構成され、他部署から独立しており、業務監査及びコンプライアンス監査を行っております。監査結果については毎月代表取締役社長及び監査役に、また、適宜サステナビリティ委員会において報告を実施しております。

会計監査の状況

a. 監査法人の名称

EY新日本有限責任監査法人

b. 継続監査期間

39年以上

c. 業務を執行した公認会計士

公認会計士の氏名	
指定有限責任社員 業務執行社員	中村 裕輔
	脇本 恵一

d. 監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士9名、会計士試験合格者等5名、その他10名です。

e. 監査法人の選定方針と理由

当社は監査法人を選定するにあたり、当社の会計監査人に必要な専門性、独立性を有し、監査の品質管理体制が適切であること、職務遂行能力や費用等を含め総合的に判断し選定しております。また、当社では、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められる場合には、監査役会において協議のうえ、監査役全員の同意によって会計監査人を解任いたします。また上記に準じる場合、その他必要があると監査役会が判断したときは、会計監査人の解任又は不再任を株主総会の目的といたします。

上記方針に基づきEY新日本有限責任監査法人に対して評価を行った結果、EY新日本有限責任監査法人は当社の会計監査人として職責を果たしていると判断したことから、当該法人を当社第56期事業年度に係る会計監査人として再任することといたしました。

f. 監査役及び監査役会による監査法人の評価

当社は監査役会において、監査法人に対する評価を行っております。監査法人から品質管理体制、監査計画及び監査結果の報告を受けるとともに、関係部署から監査活動の内容の確認を行い、監査法人の監査の方法と結果の相当性、内部統制体制、会社法第340条、公認会計士法第4条規定の会計監査人の解任事由の有無を調査し評価しております。

監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	45		47	
連結子会社				
計	45		47	

(注) 当社とEY新日本有限責任監査法人との間の監査契約において、会社法に基づく監査と金融商品取引法に基づく監査の監査報酬の額を区分しておらず、実質的にも区分できないため、上記の金額はこれらの合計額を記載しております。

b. 監査公認会計士等と同一のネットワーク (Ernst & Young) に対する報酬 (a.を除く)

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社				
連結子会社	0		1	
計	0		1	

c. その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

(前連結会計年度及び当連結会計年度)

該当事項はありません。

d. 監査報酬の決定方針

会社の規模・特性、監査日数等を勘案した上で、監査法人と協議の上、監査報酬を決定しております。

e. 監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

監査役会は、前期の監査実績の相当性、当期の監査計画の内容及び報酬額の妥当性等を検討した結果、会計監査人の報酬等に同意いたしました。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

取締役の報酬について、当社は「取締役の個人別の報酬等の内容に係る決定方針」（以下、決定方針）を取締役会で決議しており、その決定方針の内容は以下のとおりであります。

- ・役員報酬は、株主総会、取締役会決議に基づき、固定報酬である月例報酬と会社業績指標として経常利益を反映した役員賞与で構成する。
- ・個々の取締役の報酬額は、業績を勘案して定めるものとし、社長に一任する。
- ・月例報酬は月々の支払とし、役員賞与は株主総会終了後、速やかに支払う。

また、取締役の個人別の報酬等は、代表取締役社長である野房喜幸氏が、当社全体の業績等を勘案しつつ各取締役の担当部門の評価を行い、取締役会が決定した方針に沿って決定されていることから、取締役会としても、当事業年度に係る取締役の個人別の報酬等の内容が当該決定方針に沿うものであると判断しております。

監査役報酬は、月例報酬で構成されており、株主総会の決議に基づき、監査役協議により決定しております。

取締役及び監査役の報酬等についての株主総会の決議に関する事項

2012年6月28日開催の株主総会決議において、取締役報酬限度額を月額15百万円と決議し、当該株主総会終結時点の取締役員数は5名であります。また、2006年6月29日開催の株主総会決議により監査役報酬限度額を月額6百万円とし、当該株主総会終結時点の監査役は4名であります。なお、定款で取締役は11名以内、監査役は5名以内と規定されています。

取締役の個人別の報酬等の内容の決定に係る委任に関する事項

取締役会は、代表取締役社長 野房喜幸氏に各取締役の報酬等の額の決定を委任しております。委任した理由は、当社全体の業績等を勘案しつつ各取締役の担当部門について評価を行うには代表取締役社長が適していると判断したためであります。

役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額(百万円)			対象となる 役員の員数 (名)
		固定報酬	役員賞与	退職慰労金	
取締役 (社外取締役を除く。)	127	92	18	17	7
監査役 (社外監査役を除く。)	20	18		3	4
社外取締役	12	12			2
社外監査役	23	21		2	2

役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、相手企業との関係強化等を図る目的で純投資目的以外の投資株式を保有しております。なお、純投資目的（株価変動や配当による利益獲得目的）の投資株式は、保有しておりません。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a．保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社は、毎年取締役会において純投資目的以外の目的である投資株式について継続保有の要否を中長期的な経済合理性や資本コスト等の観点から検証のうえ、見直しを行っています。

b．銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	3	206
非上場株式以外の株式	10	2,033

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	-	-	
非上場株式以外の株式	3	4	持株会積立購入及び持株配当の再投資による増加

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
非上場株式	1	1
非上場株式以外の株式	-	-

c．特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果(注1) 及び株式数が増加した理由	当社の株式の保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
東鉄工業(株)	498,000	498,000	建設工事中用仮設鋼材等の賃貸・販売及び山留工事の設計・施工などの営業取引の円滑化を図るために保有しております。	無
	1,349	1,129		
日本国土開発(株)	600,000	600,000	建設工事中用仮設鋼材等の賃貸・販売及び山留工事の設計・施工などの営業取引の円滑化を図るために保有しております。	無
	362	331		
(株)安藤・間	298,084	295,024	建設工事中用仮設鋼材等の賃貸・販売及び山留工事の設計・施工などの営業取引の円滑化を図るために保有しております。	無
	255	267		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果(注1) 及び株式数が増加した理由	当社の株 式の保有 の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
飛鳥建設(株)	15,064	13,485	建設工事中用仮設鋼材等の賃貸・販売及び山留工事の設計・施工などの営業取引の円滑化を図るために保有しております。 持株会積立購入により株式数が増加しております。	無
	16	14		
(株)銭高組	4,000	4,000	建設工事中用仮設鋼材等の賃貸・販売及び山留工事の設計・施工などの営業取引の円滑化を図るために保有しております。	無
	12	17		
東洋建設(株)	12,260	12,259	建設工事中用仮設鋼材等の賃貸・販売及び山留工事の設計・施工などの営業取引の円滑化を図るために保有しております。 持株配当の再投資により株式数が増加しております。	無
	11	10		
インフロニア・ホールディングス(株)	9,361	9,361	建設工事中用仮設鋼材等の賃貸・販売及び山留工事の設計・施工などの営業取引の円滑化を図るために保有しております。	無
	10	10		
若築建設(株)	2,500	2,500	建設工事中用仮設鋼材等の賃貸・販売及び山留工事の設計・施工などの営業取引の円滑化を図るために保有しております。	無
	10	5		
三井住友建設(株)	18,210	18,210	建設工事中用仮設鋼材等の賃貸・販売及び山留工事の設計・施工などの営業取引の円滑化を図るために保有しております。	無
	7	8		
東亜建設工業(株)	500	500	建設工事中用仮設鋼材等の賃貸・販売及び山留工事の設計・施工などの営業取引の円滑化を図るために保有しております。	無
	1	1		

(注) 1 当社は、収益・配当等取引動向と資本コストの観点を含め長期的な経済合理性も踏まえ、取締役会、経営会議において保有要否を決定しています。
なお、個別銘柄の定量的な保有効果については、記載を控えさせていただきます。

みなし保有株式

該当事項はありません。

保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項はありません。

当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したものの

該当事項はありません。

当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したものの

該当事項はありません。

第5 【経理の状況】

1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号。以下、「連結財務諸表規則」という。)に基づいて作成しております。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成していません。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2022年4月1日から2023年3月31日まで)の連結財務諸表及び事業年度(2022年4月1日から2023年3月31日まで)の財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人により監査を受けております。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するため、公益財団法人財務会計基準機構に加入、同機構等の行う研修への参加を通じて、会計基準等の内容を適切に把握し、または会計基準の変更等についての確に対応することができる体制の整備に取り組んでおります。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	986	1,267
受取手形	4,517	3,445
売掛金	27,766	28,617
電子記録債権	9,027	10,696
建設仮設材	20,323	21,072
商品	1,894	2,245
製品	773	897
仕掛品	670	978
原材料及び貯蔵品	645	896
預け金	9,300	3,500
その他	254	307
貸倒引当金	27	28
流動資産合計	76,127	73,892
固定資産		
有形固定資産		
賃貸用建設機械	16,927	18,648
減価償却累計額	11,736	13,268
賃貸用建設機械（純額）	5,191	5,380
建物及び構築物	12,864	13,249
減価償却累計額	9,370	9,645
建物及び構築物（純額）	3,495	3,604
機械装置及び運搬具	8,352	11,036
減価償却累計額	6,678	8,632
機械装置及び運搬具（純額）	1,674	2,404
土地	³ 12,722	³ 12,749
その他	1,407	1,566
減価償却累計額	1,209	1,242
その他（純額）	198	324
有形固定資産合計	23,279	24,460
無形固定資産		
のれん	0	1,192
その他	786	1,190
無形固定資産合計	786	2,382
投資その他の資産		
投資有価証券	¹ 3,368	¹ 3,719
退職給付に係る資産	3,264	3,187
その他	1,047	1,462
貸倒引当金	124	121
投資その他の資産合計	7,556	8,246
固定資産合計	31,621	35,088
資産合計	107,748	108,980

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	22,485	21,266
電子記録債務	12,227	14,460
短期借入金	-	520
未払法人税等	845	1,156
賞与引当金	1,051	1,085
役員賞与引当金	24	24
受注損失引当金	67	162
その他	6,965	6,265
流動負債合計	43,664	44,937
固定負債		
長期借入金	2,110	1,725
繰延税金負債	376	935
再評価に係る繰延税金負債	3 1,578	3 1,578
役員退職慰労引当金	257	109
退職給付に係る負債	333	533
その他	-	59
固定負債合計	4,654	4,939
負債合計	48,319	49,876
純資産の部		
株主資本		
資本金	4,398	4,398
資本剰余金	4,592	4,592
利益剰余金	49,621	49,460
自己株式	25	0
株主資本合計	58,586	58,449
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	982	1,146
土地再評価差額金	3 1,000	3 1,000
為替換算調整勘定	4	14
退職給付に係る調整累計額	854	492
その他の包括利益累計額合計	840	651
非支配株主持分	4	3
純資産合計	59,429	59,104
負債純資産合計	107,748	108,980

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月 31日)
売上高	113,997	120,521
売上原価	1, 2 94,985	1, 2 100,782
売上総利益	19,011	19,739
販売費及び一般管理費		
給与諸手当	5,844	5,996
賞与引当金繰入額	943	971
退職給付費用	34	31
その他	3 7,553	3 8,238
販売費及び一般管理費合計	14,306	15,236
営業利益	4,705	4,503
営業外収益		
受取利息	8	4
受取配当金	89	94
持分法による投資利益	286	282
固定資産売却益	109	7
その他	83	42
営業外収益合計	576	429
営業外費用		
支払利息	18	14
固定資産処分損	16	12
支払補償費	8	-
自己株式取得費用	-	2
その他	0	1
営業外費用合計	43	29
経常利益	5,238	4,903
特別利益		
投資有価証券売却益	-	4 199
特別利益合計	-	199
特別損失		
減損損失	5 467	-
特別損失合計	467	-
税金等調整前当期純利益	4,771	5,102
法人税、住民税及び事業税	944	1,400
法人税等調整額	503	274
法人税等合計	1,447	1,674
当期純利益	3,324	3,428
非支配株主に帰属する当期純損失()	2	0
親会社株主に帰属する当期純利益	3,326	3,428

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
当期純利益	3,324	3,428
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	147	164
為替換算調整勘定	3	10
退職給付に係る調整額	41	362
その他の包括利益合計	185	188
包括利益	3,140	3,240
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	3,141	3,240
非支配株主に係る包括利益	1	0

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	4,398	4,596	49,595	24	58,564
会計方針の変更による累積的影響額			2,230		2,230
会計方針の変更を反映した当期首残高	4,398	4,596	47,365	24	56,334
当期変動額					
剰余金の配当			1,274		1,274
土地再評価差額金の取崩			204		204
親会社株主に帰属する当期純利益			3,326		3,326
自己株式の取得				0	0
自己株式の消却					
連結子会社の増資による持分の増減		4			4
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	-	4	2,256	0	2,252
当期末残高	4,398	4,592	49,621	25	58,586

	その他の包括利益累計額					非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	土地再評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	1,129	796	1	895	1,229	1	59,794
会計方針の変更による累積的影響額							2,230
会計方針の変更を反映した当期首残高	1,129	796	1	895	1,229	1	57,564
当期変動額							
剰余金の配当							1,274
土地再評価差額金の取崩							204
親会社株主に帰属する当期純利益							3,326
自己株式の取得							0
自己株式の消却							-
連結子会社の増資による持分の増減							4
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	147	204	3	41	389	2	387
当期変動額合計	147	204	3	41	389	2	1,865
当期末残高	982	1,000	4	854	840	4	59,429

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	4,398	4,592	49,621	25	58,586
会計方針の変更による累積的影響額					
会計方針の変更を反映した当期首残高	4,398	4,592	49,621	25	58,586
当期変動額					
剰余金の配当			1,274		1,274
土地再評価差額金の取崩					
親会社株主に帰属する当期純利益			3,428		3,428
自己株式の取得				2,291	2,291
自己株式の消却			2,315	2,315	-
連結子会社の増資による持分の増減					
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	-	-	161	24	136
当期末残高	4,398	4,592	49,460	0	58,449

	その他の包括利益累計額					非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	土地再評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	982	1,000	4	854	840	4	59,429
会計方針の変更による累積的影響額							-
会計方針の変更を反映した当期首残高	982	1,000	4	854	840	4	59,429
当期変動額							
剰余金の配当							1,274
土地再評価差額金の取崩							-
親会社株主に帰属する当期純利益							3,428
自己株式の取得							2,291
自己株式の消却							-
連結子会社の増資による持分の増減							-
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	164		10	362	188	0	189
当期変動額合計	164	-	10	362	188	0	325
当期末残高	1,146	1,000	14	492	651	3	59,104

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月 31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	4,771	5,102
減価償却費	2,856	3,193
減損損失	467	-
のれん償却額	-	97
貸倒引当金の増減額（ は減少）	0	1
賞与引当金の増減額（ は減少）	59	17
退職給付に係る資産の増減額（ は増加）	152	163
退職給付に係る負債の増減額（ は減少）	25	200
退職給付費用	270	282
役員退職慰労引当金の増減額（ は減少）	23	148
受注損失引当金の増減額（ は減少）	66	95
役員賞与引当金の増減額（ は減少）	15	0
受取利息及び受取配当金	98	98
支払利息	18	14
持分法による投資損益（ は益）	286	282
固定資産処分損益（ は益）	93	5
賃貸用建設機械売却損益（ は益）	339	308
投資有価証券売却損益（ は益）	-	199
売上債権の増減額（ は増加）	1,011	1,128
棚卸資産の増減額（ は増加）	801	1,796
その他の流動資産の増減額（ は増加）	35	26
破産更生債権等の増減額（ は増加）	0	5
仕入債務の増減額（ は減少）	4,395	374
未払消費税等の増減額（ は減少）	528	60
その他の流動負債の増減額（ は減少）	620	894
その他の固定負債の増減額（ は減少）	1	20
為替差損益（ は益）	7	1
その他	35	31
小計	9,900	3,876
利息及び配当金の受取額	364	253
利息の支払額	22	14
法人税等の支払額	1,273	1,163
法人税等の還付額	129	0
営業活動によるキャッシュ・フロー	9,097	2,952

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月 31日)
投資活動によるキャッシュ・フロー		
賃貸用建設機械の取得による支出	1,711	1,440
賃貸用建設機械の売却による収入	361	308
その他の有形固定資産の取得による支出	1,064	1,164
その他の有形固定資産の売却による収入	134	13
その他の有形固定資産の除却による支出	42	2
無形固定資産の取得による支出	276	236
投資有価証券の取得による支出	4	4
投資有価証券の売却による収入	-	200
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出	-	2,049
その他の投資による支出	55	433
その他の投資の回収による収入	47	56
投資活動によるキャッシュ・フロー	2,610	4,750
財務活動によるキャッシュ・フロー		
長期借入金の返済による支出	1,960	160
自己株式の取得による支出	0	2,294
ファイナンス・リース債務の返済による支出	0	-
配当金の支払額	1,274	1,274
財務活動によるキャッシュ・フロー	3,234	3,728
現金及び現金同等物に係る換算差額	16	7
現金及び現金同等物の増減額（は減少）	3,269	5,519
現金及び現金同等物の期首残高	7,017	10,286
現金及び現金同等物の期末残高	1 10,286	1 4,767

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1 連結の範囲に関する事項

子会社6社すべてを連結しております。

連結子会社名は、「第1 企業の概況 4 関係会社の状況」に記載のとおりであります。

当連結会計年度において、株式会社オトワコーエイの全株式を2022年4月1日に取得し、連結の範囲に含めております。また、当社の連結子会社であった株式会社レンタルシステム東北、株式会社レンタルシステム東海、株式会社レンタルシステム西日本及び株式会社レンタルシステム信越は2022年4月1日付で同じく連結子会社である株式会社レンタルシステム関東を存続会社とする吸収合併により消滅したため、連結の範囲から除外しております。なお、株式会社レンタルシステム関東は2022年4月1日付でレンタルシステム株式会社に社名変更しております。

2 持分法の適用に関する事項

(1) 下記の関連会社1社に対する投資について持分法を適用しております。

協友リース㈱

(2) 関連会社である北日本建材リース㈱につきましては、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ、全体としても重要性がないため持分法の適用範囲から除外しております。

3 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社である株式会社オトワコーエイの決算日は2月末日であり、ベトナム現地法人GECOSS VIETNAM COMPANY LIMITEDの決算日は12月末日であります。

連結財務諸表の作成にあたっては、同日現在の財務諸表を使用し、連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。その他の連結子会社の決算日は、連結決算日と一致しております。

4 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定しております。)

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法

建設仮設材

先入先出法による原価から定額法により計算した減耗費を控除する方法(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

その他の棚卸資産

主として移動平均法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産(リース資産を除く)

定率法

ただし、1998年4月1日以降に取得した建物(建物附属設備を除く)、2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物、並びに連結子会社が保有する賃貸用建設機械については定額法

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

賃貸用建設機械 6～7年

建物及び構築物 10～47年

機械装置及び運搬具 6～10年

無形固定資産(リース資産を除く)

定額法

なお、のれんについては効果の発現する期間を合理的に見積り、当該期間(10年)にわたり均等償却

リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額をリース契約上に残価保証の取決めのあるものは当該残価保証額、それ以外のものは零とする定額法によっております。

(3) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権及び破産更生債権等については財務内容評価法により回収不能見込額を計上しております。

賞与引当金

従業員及び執行役員(取締役である執行役員を除く)の賞与支給に充てるため、支給見込額基準により計上しております。

役員賞与引当金

役員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

受注損失引当金

受注契約に係る将来の損失に備えるため、当連結会計年度末における受注契約のうち損失の発生が見込まれ、かつ、その金額を合理的に見積もることができる受注契約について損失見込額を計上しております。

役員退職慰労引当金

役員の退職慰労金の支出に備えるため、内規に基づく期末要支給額を計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額をそれぞれ発生翌連結会計年度から費用処理することとしております。

小規模企業等における簡便法の採用

一部の連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

当社グループは、下記の5ステップアプローチに基づいて、収益を認識しております。

ステップ1：顧客との契約を識別する

ステップ2：契約における履行義務を識別する

ステップ3：取引価格を算定する

ステップ4：取引価格を契約における履行義務に配分する

ステップ5：企業が履行義務の充足時に(又は充足するにつれて)収益を認識する

当社グループは、重仮設事業において、主として建設仮設材及び関連商品群の賃貸・販売、仮設工事の施工を行うほか、建設機械事業においては、主として賃貸用建設機械の賃貸を行っており、ともに財・サービスの引き渡し、提供を履行義務として認識しております。

販売に係る収益

原則として顧客に引き渡された時点又は顧客が検収した時点で収益を認識しておりますが、国内の取引については出荷時点で収益を認識しております。

なお、取引において当社及び連結子会社が代理人に該当すると判断したものについては、顧客から受け取る対価の総額から仕入先に対する支払額を差し引いた純額で収益を認識しております。

賃貸及び工事に係る収益

一定の期間にわたり履行義務が充足されると判断しており、賃貸については顧客による財の使用期間に応じ、工事については工事契約における履行義務の充足にかかる進捗度をインプット法により測定し収益を認識しております。

なお、工事契約において進捗度を合理的に見積もることができないが、発生する費用を回収することが見込まれる場合は、原価回収基準にて収益を認識しております。

収益は顧客との契約において約束された対価から、値引き等を控除した金額で測定しております。また、買戻条件が付された建設仮設材の取引に係る収益の認識方法においては、顧客から受け取ると見込まれる対価の額を見積もった顧客の使用予定期間にわたって収益を認識しております。

なお、取引の対価は履行義務を充足してから概ね1年以内に受領しており、重要な金融要素は含まれておりません。

(6) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりスクしか負わない取得日から3か月以内に償還期限の到来する短期投資

(会計方針の変更)

「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号2021年6月17日。以下「時価算定会計基準適用指針」という。）を当連結会計年度の期首から適用し、時価算定会計基準適用指針第27 - 2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準適用指針が定める新たな会計方針を将来にわたって適用することとしております。この適用による連結財務諸表への影響はありません。

(未適用の会計基準等)

- ・「法人税、住民税及び事業税等に関する会計基準」（企業会計基準第27号 2022年10月28日）
- ・「包括利益の表示に関する会計基準」（企業会計基準第25号 2022年10月28日）
- ・「税効果会計に係る会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第28号 2022年10月28日）

(1) 概要

その他の包括利益に対して課税される場合の法人税等の計上区分及びグループ法人税制が適用される場合の子会社株式等の売却に係る税効果の取扱いを定めるもの。

(2) 適用予定日

2025年3月期の期首より適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

影響額は、当連結財務諸表の作成時において評価中であります。

- ・「電子記録移転有価証券表示権利等の発行及び保有の会計処理及び開示に関する取扱い」（実務対応報告第43号 2022年8月26日）

(1) 概要

株式会社が「金融商品取引業等に関する内閣府令」（平成19年内閣府令第52号。）第1条第4項第17号に規定される「電子記録移転有価証券表示権利等」を発行又は保有する場合の会計処理及び開示に関する取扱いを定めるもの。

(2) 適用予定日

2024年3月期の期首より適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

影響額は、当連結財務諸表の作成時において評価中であります。

(表示方法の変更)

(連結貸借対照表関係)

前連結会計年度において、「無形固定資産」に含めていた「のれん」は、重要性が増したため、当連結会計年度より独立掲記しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組み替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「無形固定資産」に表示しておりました786百万円は、「のれん」0百万円及び「その他」786百万円として組み替えております。

(追加情報)

新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響に関する会計上の見積り

新型コロナウイルス感染症の拡大により、経済環境の悪化及びそれに伴う建設需要への影響が考えられます。

このような状況の中、新型コロナウイルス感染症の今後の収束の時期等については不透明で、当社グループの業績への影響を予測することは困難であります。当連結会計年度末における将来の見積りについては、翌連結会計年度及びそれ以降への感染拡大影響は軽微なものとして仮定しております。

(連結貸借対照表関係)

- 1 関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
投資有価証券(株式)	1,335百万円	1,446百万円

- 2 受取手形裏書譲渡高

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
	40百万円	55百万円

- 3 土地の再評価

連結財務諸表提出会社は、「土地の再評価に関する法律」(平成10年3月31日公布法律第34号)及び「土地の再評価に関する法律の一部を改正する法律」(平成13年3月31日公布法律第19号)に基づき、事業用の土地の再評価を行い、当該評価差額に係る繰延税金負債を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

・再評価の方法...「土地の再評価に関する法律施行令」(平成10年3月31日公布政令第119号)第2条第3号に定める固定資産税評価額に合理的な調整を行って算定する方法、及び第4号に定める路線価に合理的な調整を行って算定する方法によっております。

・再評価を行った年月日...2002年3月31日

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
再評価を行った土地の時価の下落による期末における再評価後の帳簿価額との差額	4,851百万円	4,633百万円

(連結損益計算書関係)

1 売上原価に含まれている収益性の低下に伴う簿価切下げ額は、次のとおりであります。

前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
4百万円	5百万円

2 売上原価に含まれている受注損失引当金繰入額は、次のとおりであります。

前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
66百万円	95百万円

3 一般管理費及び当期製造費用に含まれる研究開発費の総額は、次のとおりであります。

前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
45百万円	43百万円

4 投資有価証券売却益

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

政策保有株式の一部(非上場株式1銘柄)を売却したことにより発生したものであります。

5 減損損失

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

前連結会計年度において、当社グループは以下の資産グループについて減損損失を計上しております。

場所	用途	種類	減損損失(百万円)
ジェコス(株) 北海道地域	事業用資産	土地建物等	411
ジェコス(株) 千葉県白井市	遊休資産	土地建物等	56

(減損判定の方法)

原則として、本業に関わる事業用資産とその他の資産に分類し、当社の事業用資産に関しては地域別に、連結子会社は各社を一つの単位としてグルーピングを行っております。また、その他の資産に含まれる賃貸用不動産、遊休資産及び処分予定資産に関しては物件ごとにグルーピングを行っております。

北海道地域に保有する土地建物等については、北海道地域における重仮設事業の収益性が低下したことに伴い当該資産の帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。なお、事業用資産の回収可能価額は、正味売却可能価額により算定しております。正味売却可能価額は鑑定評価基準等を基に測定した金額により評価しております。

また、千葉県白井市に保有する土地建物等については、老朽化した倉庫の解体に伴う当該資産の遊休化により、帳簿価額を回収可能価額まで減額しております。なお、遊休資産の回収可能価額は、鑑定評価基準等を基にした正味売却可能価額により評価しております。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

該当事項はありません。

(連結包括利益計算書関係)

その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	211百万円	236百万円
組替調整額	-	-
税効果調整前	211	236
税効果額	64	72
その他有価証券評価差額金	147	164
土地再評価差額金		
税効果額	-	-
為替換算調整勘定		
当期発生額	3	10
退職給付に係る調整額		
当期発生額	211	240
組替調整額	270	282
税効果調整前	59	522
税効果額	18	160
退職給付に係る調整額	41	362
その他の包括利益合計	185	188

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度末 株式数
普通株式	36,436,125株	-株	-株	36,436,125株

2. 自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度末 株式数
普通株式	39,855株	239株	-株	40,094株

(注) 自己株式数の増加は、単元未満株式の買取による増加であります。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2021年6月17日 定時株主総会	普通株式	728	20	2021年3月31日	2021年6月18日
2021年10月26日 取締役会	普通株式	546	15	2021年9月30日	2021年12月1日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2022年6月23日 定時株主総会	普通株式	728	利益剰余金	20	2022年3月31日	2022年6月24日

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度末 株式数
普通株式	36,436,125株	- 株	2,640,379株	33,795,746株

(注) 発行済株式の減少は、自己株式の消却によるものであります。

2. 自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度末 株式数
普通株式	40,094株	2,600,490株	2,640,379株	205株

(注) 自己株式の増加は、単元未満株式の買取り(490株)及び取締役会決議による取得(2,600,000株)によるものであります。

自己株式の減少は、消却によるものであります。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2022年6月23日 定時株主総会	普通株式	728	20	2022年3月31日	2022年6月24日
2022年10月27日 取締役会	普通株式	546	15	2022年9月30日	2022年12月1日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2023年6月22日 定時株主総会	普通株式	676	利益剰余金	20	2023年3月31日	2023年6月23日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
現金及び預金	986百万円	1,267百万円
預け金	9,300	3,500
現金及び現金同等物	10,286	4,767

2 株式の取得により新たに連結子会社となった会社の資産及び負債の主な内訳

株式の取得により新たに株式会社オトワコーエイを連結したことに伴う連結開始時の資産及び負債の内訳並びに
同社株式の取得価額と取得のための支出(純額)との関係は次のとおりです。

流動資産	737	百万円
固定資産	1,531	"
のれん	1,289	"
流動負債	541	"
固定負債	557	"
株式の取得価額	2,460	百万円
現金及び現金同等物	411	"
差引：取得のための支出	2,049	百万円

(リース取引関係)

1 オペレーティング・リース取引(借主側)

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
1年内	8	8
1年超	14	9
合計	22	17

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用については短期的な預金等及びJFEホールディングス株式会社に対する預け金に限定しております。また、資金調達については金融機関からの借入及びファイナンス・リース取引等によっております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金並びに電子記録債権は、顧客の信用リスクに晒されております。

投資有価証券である株式は、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、市場価格の変動リスクに晒されております。

営業債務である支払手形及び買掛金並びに電子記録債務は、1年以内の支払期日であります。

借入金のうち短期借入金は主に営業取引に係る資金調達であり、長期借入金及びファイナンス・リース取引に係るリース債務は主に設備投資及び長期運転資金に必要な資金調達を目的としたものであります。なお、返済日及び償還日は決算日後、最長で4年後であります。

また、営業債務や借入金及びリース債務は、流動性リスクを認識しております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスク(取引先の契約不履行等に係るリスク)の管理

当社は、信用管理規程に従い、取引先ごとの期日管理及び残高管理を行うとともに、財務状況等を定期的にモニタリングし、信用度合に応じて与信限度枠を設定することで不良債権の発生防止に努める体制を取っております。連結子会社についても、当社の信用管理規程に準じて、同様の管理を行っております。

市場リスク(金利等の変動リスク)の管理

投資有価証券である株式は、投資取扱規程に従って、定期的に時価や投資先の財務状況等を把握するとともに、投資効果を勘案して保有状況を見直すことで市場リスクを管理しております。

資金調達に係る流動性リスク(支払期日に支払いを実行できなくなるリスク)の管理

当社グループでは、各部署からの報告に基づき、財務部が資金繰計画を作成・更新することにより流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

2023年3月31日における連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

前連結会計年度(2022年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
投資有価証券	1,827	1,827	-
資産計	1,827	1,827	-
長期借入金(1年以内に返済予定の長期借入金を含む)	2,110	2,114	4
負債計	2,110	2,114	4

当連結会計年度(2023年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
投資有価証券	2,067	2,067	-
資産計	2,067	2,067	-
長期借入金(1年以内に返済予定の長期借入金を含む)	2,244	2,244	0
負債計	2,244	2,244	0

(注1) 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券に関する事項

資産

現金及び預金、受取手形、売掛金、電子記録債権、預け金

これらは短期間で決済されるものであるため、時価が帳簿価額に近似するものであることから、注記を省略しております。

投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格によっております。また、保有目的ごとの有価証券に関する事項については、注記事項「有価証券関係」をご参照下さい。

負債

支払手形及び買掛金、電子記録債務、短期借入金

これらは短期間で決済されるものであるため、時価が帳簿価額に近似するものであることから、注記を省略しております。

長期借入金(1年以内に返済予定の長期借入金を含む)

長期借入金の時価については、元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

(注2) 市場価格のない株式等

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
非上場株式	207	206

これらについては、「投資有価証券」には含めておりません。

(注3) 金銭債権の連結決算日後の償還予定額
前連結会計年度(2022年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超5年以内 (百万円)	5年超10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	980	-	-	-
受取手形	4,510	-	-	-
売掛金	27,750	-	-	-
電子記録債権	9,026	-	-	-
預け金	9,300	-	-	-
合計	51,566	-	-	-

当連結会計年度(2023年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超5年以内 (百万円)	5年超10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	1,263	-	-	-
受取手形	3,437	-	-	-
売掛金	28,599	-	-	-
電子記録債権	10,695	-	-	-
預け金	3,500	-	-	-
合計	47,493	-	-	-

(注4) 短期借入金及び長期借入金(1年以内に返済予定の長期借入金を含む)の連結決算日後の返済予定額
前連結会計年度(2022年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	-	-	-	-	-	-
長期借入金	-	410	1,130	-	570	-
合計	-	410	1,130	-	570	-

当連結会計年度(2023年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	-	-	-	-	-	-
長期借入金	520	1,155	-	570	-	-
合計	520	1,155	-	570	-	-

3. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に用いたインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：同一の資産又は負債の活発な市場における（無調整の）相場価格により算定した時価

レベル2の時価：レベル1のインプット以外の直接又は間接的に観察可能なインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：重要な観察できないインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価をもって連結貸借対照表計上額とする金融資産及び金融負債
 前連結会計年度（2022年3月31日）

区分	時価（百万円）			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券	1,827	-	-	1,827
資産計	1,827	-	-	1,827
該当事項はありません。	-	-	-	-
負債計	-	-	-	-

当連結会計年度（2023年3月31日）

区分	時価（百万円）			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券	2,067	-	-	2,067
資産計	2,067	-	-	2,067
該当事項はありません。	-	-	-	-
負債計	-	-	-	-

(2) 時価をもって連結貸借対照表計上額としない金融資産及び金融負債

前連結会計年度(2022年3月31日)

区分	時価(百万円)			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
該当事項はありません。	-	-	-	-
資産計	-	-	-	-
長期借入金 (1年以内に返済予定の長期借入金を含む)	-	2,114	-	2,114
負債計	-	2,114	-	2,114

当連結会計年度(2023年3月31日)

区分	時価(百万円)			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
該当事項はありません。	-	-	-	-
資産計	-	-	-	-
長期借入金 (1年以内に返済予定の長期借入金を含む)	-	2,244	-	2,244
負債計	-	2,244	-	2,244

(注) 時価の算定に用いた評価技法及びインプットの説明

投資有価証券

活発な市場における相場価格を用いて上場株式を評価しており、レベル1の時価に分類しております。

長期借入金

借入契約毎に分類した当該長期借入金の元利金を同様の借入において想定される利率で割り引いた現在価値により算定しており、レベル2の時価に分類しております。

(有価証券関係)

1 その他有価証券

前連結会計年度(2022年3月31日)

種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの			
株式	1,805	384	1,421
債券	-	-	-
その他	-	-	-
小計	1,805	384	1,421
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの			
株式	22	26	5
債券	-	-	-
その他	-	-	-
小計	22	26	5
合計	1,827	411	1,416

(注) 非上場株式(連結貸借対照表計上額207百万円)については、市場価格がないことから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度(2023年3月31日)

種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの			
株式	2,044	386	1,658
債券	-	-	-
その他	-	-	-
小計	2,044	386	1,658
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの			
株式	23	28	5
債券	-	-	-
その他	-	-	-
小計	23	28	5
合計	2,067	415	1,653

(注) 非上場株式(連結貸借対照表計上額206百万円)については、市場価格がないことから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

2 連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	200	199	-
債券	-	-	-
その他	-	-	-
合計	200	199	-

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当社は、確定給付企業年金及び確定拠出年金を主たる制度として採用しております。

連結子会社は、主として中小企業退職金共済制度に加入しておりますが、一部の連結子会社では退職一時金制度を併用しております。

なお、一部の連結子会社が有する退職一時金制度は、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しているほか、当社及び一部の連結子会社が有する執行役員(取締役である執行役員を除く)には、退職慰労金制度を設けており、内規に基づく期末要支給額により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

2 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表((3)に掲げられたものを除く)

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
退職給付債務の期首残高	5,819	5,943
勤務費用	285	296
利息費用	27	27
数理計算上の差異の発生額	49	48
退職給付の支払額	237	261
簡便法から原則法への変更に伴う振替額	-	203
簡便法から原則法への変更に伴う費用処理額	-	111
退職給付債務の期末残高	5,943	6,272

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表((3)に掲げられたものを除く)

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
年金資産の期首残高	8,720	9,207
期待運用収益	262	276
数理計算上の差異の発生額	260	288
事業主からの拠出額	203	210
退職給付の支払額	237	261
年金資産の期末残高	9,207	9,144

(3) 簡便法を採用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
退職給付に係る負債の期首残高	308	333
退職給付費用	79	101
退職給付の支払額	54	70
簡便法から原則法への変更に伴う振替額	-	203
その他	-	56
退職給付に係る負債の期末残高	333	218

(注) 当社執行役員(取締役である執行役員を除く)に係る制度を含めております。

(4) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	5,943	5,958
年金資産	9,207	9,144
	3,264	3,187
非積立型制度の退職給付債務	333	533
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	2,931	2,654
退職給付に係る負債	333	533
退職給付に係る資産	3,264	3,187
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	2,931	2,654

(5) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
勤務費用	408	434
利息費用	27	27
期待運用収益	262	276
数理計算上の差異の費用処理額	128	211
過去勤務費用の費用処理額	141	71
簡便法から原則法への変更に伴う費用処理額	-	111
その他	2	2
確定給付制度に係る退職給付費用	96	17

(注) 簡便法を採用している連結子会社及び執行役員(取締役である執行役員を除く)の退職給付費用は、勤務費用に含めて計上しております。

(6) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
過去勤務費用	141	71
数理計算上の差異	82	451
合計	59	522

(7) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
未認識過去勤務費用	71	-
未認識数理計算上の差異	1,160	708
合計	1,230	708

(8) 年金資産に関する事項

年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
株式	42.9%	29.7%
生保一般勘定	26.8%	31.4%
債券	27.5%	36.9%
現金及び預金	2.8%	2.0%
合計	100.0%	100.0%

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(9) 数理計算上の計算基礎に関する事項

数理計算上の計算基礎

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
割引率	0.5%	0.5%
長期期待運用収益率	3.0%	3.0%

3 確定拠出制度

当社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度96百万円、当連結会計年度99百万円であります。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
繰延税金資産		
収益認識基準変更	608百万円	360百万円
賞与引当金	327	339
貸倒引当金	46	45
退職給付に係る負債	110	177
未払事業税	63	75
会員権評価損	80	80
役員退職慰労引当金	83	35
減損損失	21	7
未払社会保険料	43	46
棚卸資産の未実現利益	33	34
子会社株式	2	2
その他	131	225
繰延税金資産小計	1,546	1,425
評価性引当額	196	206
繰延税金資産合計	1,350	1,219
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	436	508
退職給付に係る資産	998	974
企業結合に伴う評価差額	-	346
その他	30	50
繰延税金負債合計	1,464	1,878
繰延税金資産(負債)の純額	114	659

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
法定実効税率	30.58%	30.58%
(調整)		
交際費等永久に損金に 算入されない項目	1.15	1.30
受取配当金等永久に益金に 算入されない項目	0.12	0.12
住民税均等割	1.09	1.06
評価性引当額	0.99	0.24
税額控除	0.11	0.37
連結調整項目	1.39	0.01
その他	0.11	0.11
税効果会計適用後の法人税等の 負担率	30.32	32.81

(企業結合等関係)
(共通支配下の取引等)

当社は、2021年12月24日開催の取締役会での決議に基づき、2022年4月1日に子会社の組織再編を行いました。

1. 取引の概要

(1) 結合当事企業及びその事業の内容

結合企業の名称	株式会社レンタルシステム関東
事業の内容	建設機械等の賃貸及び販売
被結合企業の名称	株式会社レンタルシステム東北、株式会社レンタルシステム東海、 株式会社レンタルシステム西日本及び株式会社レンタルシステム信越
事業の内容	建設機械等の賃貸及び販売

(2) 企業結合日

2022年4月1日

(3) 企業結合の法的形式

株式会社レンタルシステム関東を存続会社とし、株式会社レンタルシステム東北、株式会社レンタルシステム東海、株式会社レンタルシステム西日本及び株式会社レンタルシステム信越を消滅会社とする吸収合併方式。

(4) 結合後企業の名称

レンタルシステム株式会社

(5) その他取引の概要に関する事項

建機レンタル事業を行う子会社5社（以下、レンタルシステムグループ5社という）は、地域に密着した営業を展開し、高所作業車を主力商品とした資産構成で成長を続けてまいりました。しかしながら、建機レンタル業界は今後も成長が見込める一方、大手レンタル会社による系列化等再編が加速し、競争が激化しております。このような状況の中で、レンタルシステムグループ5社の統合により、地域密着の営業は強化しつつ、経営資源を集約して店舗網拡大に繋げてまいります。また、機種構成の見直しも進め社会ニーズに応えた新機種の導入を行うとともに、スピーディーに課題解決できるスリムな業務運営体制で、ジェコス及びJFEグループとの連携を深め、より一層社会貢献と事業拡大を図っていくことといたしました。将来的には、現状拠点のない営業地域での事業展開も目指してまいります。

また、統合により、コンプライアンス体制強化や、社員が働きやすい環境づくりを一層加速させてまいります。

5社の統合により、社員が充実感・誇りをもつ、未来志向で社会に貢献する、成長力ある企業を目指してまいります。

株式会社レンタルシステム関東、株式会社レンタルシステム東北、株式会社レンタルシステム東海、株式会社レンタルシステム西日本及び株式会社レンタルシステム信越

2. 実施した会計処理の概要

「企業結合に関する会計基準」及び「企業結合会計基準及び事業分離等会計基準に関する適用指針」に基づき、共通支配下の取引として処理いたしました。

(取得による企業結合)

当社は、2022年2月25日開催の取締役会での決議に基づき、特殊基礎工事業を行う株式会社オトワコーエイ（以下、「オトワコーエイ」という）の全株式を2022年4月1日に取得いたしました。

1. 企業結合の概要

(1) 被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称 株式会社オトワコーエイ

事業の内容 特殊コンクリート工事業、杭打業、基礎工事 他

(2) 企業結合を行った主な理由

オトワコーエイは静岡県沼津市を中心に地盤改良、本杭工事などの基礎工事や仮設工事、障害物撤去工事等の施工工事を手掛けております。また同社は狭隘地や急傾斜地、空頭制限地、河川・海上などの特殊環境下における高い技術力を有しております。

同社の事業内容は当社グループが『ジェコスグループ10年VISION』に掲げる「地下工事一式受注」のロードマップに合致し、当社グループの営業力と同社の高い施工技術力の組み合わせによる事業拡大のシナジーが創出できることから、本件株式を取得することといたしました。

(3) 企業結合日

2022年4月1日（株式取得日）

2022年5月31日（みなし取得日）

(4) 企業結合の法的形式

現金を対価とする株式取得

(5) 結合後企業の名称

変更はありません。

(6) 取得した議決権比率

100%

(7) 取得企業を決定するに至った主な根拠

当社が、現金を対価とした株式取得により、議決権の100%を取得したことによります。

2. 連結財務諸表に含まれている被取得企業の業績の期間

2022年6月1日から2023年2月28日まで

3. 被取得企業の取得原価及び対価の種類ごとの内訳

取得の対価	現金	2,460百万円
取得原価		2,460百万円

4. 主要な取得関連費用の内訳及び金額

アドバイザー費用等 147百万円

5. 発生したのれんの金額、発生原因、償却の方法及び償却期間

(1) 発生したのれんの金額

1,289百万円

(2) 発生原因

主として今後の事業展開によって期待される将来の超過収益力であります。

(3) 償却方法及び償却期間

10年間にわたる均等償却

6. 企業結合日に受け入れた資産及び引き受けた負債の額並びにその主な内訳

流動資産	737百万円
固定資産	1,531百万円
資産合計	2,268百万円
流動負債	541百万円
固定負債	557百万円
負債合計	1,097百万円

7. 企業結合が連結会計年度の開始の日に完了したと仮定した場合の当連結会計年度の連結財務諸表に及ぼす影響の概算額及びその算定方法

当該影響の概算額に重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

賃貸等不動産の総額に重要性が乏しいため、注記を省略しております。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

賃貸等不動産の総額に重要性が乏しいため、注記を省略しております。

(収益認識関係)

1 顧客との契約から生じる収益を分解した情報

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(単位：百万円)

	報告セグメント		
	重仮設	建設機械	計
一時点で移転される財及びサービス	68,547	4,407	72,953
一定の期間にわたり移転される財及びサービス	32,976	8,067	41,043
顧客との契約から生じる収益	101,523	12,474	113,997
その他の収益	-	-	-
外部顧客への売上高	101,523	12,474	113,997

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

(単位：百万円)

	報告セグメント		
	重仮設	建設機械	計
一時点で移転される財及びサービス	74,223	4,592	78,814
一定の期間にわたり移転される財及びサービス	33,287	8,420	41,706
顧客との契約から生じる収益	107,509	13,012	120,521
その他の収益	-	-	-
外部顧客への売上高	107,509	13,012	120,521

2 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

収益を理解するために基礎となる情報は、「(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項) 4 会計方針に関する事項 (5) 重要な収益及び費用の計上基準」に記載の通りであります。

3 顧客との契約に基づく履行義務の充足と当該契約から生じるキャッシュ・フローとの関係並びに当連結会計年度末において存在する顧客との契約から翌連結会計年度以降に認識すると見込まれる収益の金額及び時期に関する情報

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(1) 契約負債の残高等

(単位：百万円)

	当連結会計年度
顧客との契約から生じた債権（期首残高）	40,319
顧客との契約から生じた債権（期末残高）	41,310
契約負債（期首残高）	1,006
契約負債（期末残高）	1,405

- (注) 1 契約負債は、主に、重仮設事業における顧客からの前受金に関するものであり、収益の認識に伴い取り崩されます。
- 2 前受金は連結貸借対照表の「その他の流動負債」に計上しております。
- 3 当連結会計年度に認識された収益の額のうち期首現在の契約負債残高に含まれていた額は、986百万円であります。
- 4 過去の期間に充足(又は部分的に充足)した履行義務から、当連結会計年度に認識した収益(例えば、取引価格の変動)の額に重要性はありません。

(2) 残存履行義務に配分した取引価格

当社グループにおいては、個別の予想契約期間が1年を超える重要な取引がないため、実務上の便法を適用し、残存履行義務に関する情報の記載を省略しております。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

(1) 契約負債の残高等

(単位：百万円)

	当連結会計年度
顧客との契約から生じた債権（期首残高）	41,310
顧客との契約から生じた債権（期末残高）	42,758
契約負債（期首残高）	1,405
契約負債（期末残高）	1,486

- (注) 1 契約負債は、主に、重仮設事業における顧客からの前受金に関するものであり、収益の認識に伴い取り崩されます。
- 2 前受金は連結貸借対照表の「その他の流動負債」に計上しております。
- 3 当連結会計年度に認識された収益の額のうち期首現在の契約負債残高に含まれていた額は、1,398百万円であります。
- 4 過去の期間に充足(又は部分的に充足)した履行義務から、当連結会計年度に認識した収益(例えば、取引価格の変動)の額に重要性はありません。

(2) 残存履行義務に配分した取引価格

当社グループにおいては、個別の予想契約期間が1年を超える重要な取引がないため、実務上の便法を適用し、残存履行義務に関する情報の記載を省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、当社取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、営業品目別のセグメントから構成されており、「重仮設事業」、「建設機械事業」を報告セグメントとしております。各会社は、いずれかの事業に属し、当社取締役会での経営意思決定を受けて、営業戦略を立案し事業活動を展開しております。

「重仮設事業」は、建設工事前仮設鋼材の賃貸及び販売を中心に、それに関連する仮設工事の設計施工、特殊加工製品の製作及び販売等を行っております。「建設機械事業」は、建設機械の賃貸等を行っております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であります。報告セグメントの利益は、経常利益をベースとした数値であります。

なお、セグメント間の内部売上高及び振替高は、第三者間取引価格に基づいております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(単位：百万円)

	重仮設	建設機械	合計	調整額 (注) 1	連結財務諸表 計上額(注) 2
売上高					
外部顧客への売上高	101,523	12,474	113,997	-	113,997
セグメント間の内部 売上高又は振替高	2,996	1,212	4,208	4,208	-
計	104,519	13,686	118,205	4,208	113,997
セグメント利益	5,098	346	5,445	206	5,238
セグメント資産	98,320	10,849	109,170	1,422	107,748
その他の項目					
減価償却費	961	1,895	2,856	-	2,856
受取利息	10	2	12	4	8
支払利息	20	2	22	4	18
持分法による投資利益	286	-	286	-	286
持分法適用会社への投資額	1,086	-	1,086	-	1,086
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	1,035	2,214	3,248	-	3,248

(注) 1 セグメント利益、セグメント資産及びその他の項目の調整額は、連結調整によるものであります。

2 セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

(単位：百万円)

	重仮設	建設機械	合計	調整額 (注) 1	連結財務諸表 計上額(注) 2
売上高					
外部顧客への売上高	107,509	13,012	120,521	-	120,521
セグメント間の内部 売上高又は振替高	1,235	1,242	2,477	2,477	-
計	108,744	14,254	122,998	2,477	120,521
セグメント利益	4,844	206	5,049	146	4,903
セグメント資産	99,109	11,586	110,695	1,714	108,980
その他の項目					
減価償却費	1,301	1,892	3,193	-	3,193
受取利息	5	1	6	2	4
支払利息	15	1	16	2	14
持分法による投資利益	282	-	282	-	282
持分法適用会社への投資額	1,198	-	1,198	-	1,198
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	1,164	2,234	3,399	24	3,375

(注) 1 セグメント利益、セグメント資産及びその他の項目の調整額は、連結調整によるものであります。

2 セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

【関連情報】

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

(単位：百万円)

	重仮設	建設機械	合計
外部顧客への売上高	101,523	12,474	113,997

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

(単位：百万円)

	重仮設	建設機械	合計
外部顧客への売上高	107,509	13,012	120,521

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(単位：百万円)

	重仮設	建設機械	合計
減損損失	467	-	467

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

のれんの償却額及び未償却残高の総額に重要性が乏しいため、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

(単位：百万円)

	重仮設	建設機械	合計
当期償却額	97	-	97
当期末残高	1,192	-	1,192

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1. 関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社の親会社及び法人主要株主等

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金(百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合(%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額(百万円)	科目	期末残高(百万円)
親会社	J F E スチール(株)	東京都千代田区	239,645	鉄鋼製品の製造・販売	(被所有) 直接 50.97 間接 0.01	大口仕入先 役員の兼任等	商品の仕入等	51	買掛金	-
親会社	J F E ホールディングス(株)	東京都千代田区	147,143	J F E グループの経営戦略立案・管理	(被所有) 間接 61.98	資金の預け先	資金の預入	3,400	預け金	9,300

(注) 1 取引条件及び取引条件の決定方針等

市場価格等を勘案して価格交渉のうえ、取引条件を決定しております。

2 資金の預入については、市場金利等を勘案しており、利率を合理的に決定しております。

3 資金の預入の取引金額については、前期末残との純増減額を記載しております。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金(百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合(%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額(百万円)	科目	期末残高(百万円)
親会社	J F E スチール(株)	東京都千代田区	239,645	鉄鋼製品の製造・販売	(被所有) 直接 47.65 間接 0.01	役員の兼任	自己株式の取得	2,157	-	-
親会社	J F E ホールディングス(株)	東京都千代田区	147,143	J F E グループの経営戦略立案・管理	(被所有) 間接 59.50	資金の預け先	資金の預入	5,800	預け金	3,500

(注) 1 取引条件及び取引条件の決定方針等

市場価格等を勘案して価格交渉のうえ、取引条件を決定しております。

2 資金の預入については、市場金利等を勘案しており、利率を合理的に決定しております。

3 資金の預入の取引金額については、前期末残との純増減額を記載しております。

4 自己株式の取得は、株式会社東京証券取引所の自己株式立会外買付取引(ToSTNeT-3)による買付けです。

(2)連結財務諸表提出会社と同一の親会社をもつ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係会社の子会社等
前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金(百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合(%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額(百万円)	科目	期末残高(百万円)
同一の親会社を持つ会社	J F E 商事鉄鋼建材(株)	東京都千代田区	1,500	建材製品等の販売		大口仕入先	商品の仕入等	9,843	買掛金	5,724
							商品の販売先	商品の販売等	1,202	売掛金
同一の親会社を持つ会社	J F E 西日本ジーエス(株)	広島県福山市鋼管町1番地	50	総合サービス業		商品の貸出先	商品の賃貸等	2,739	売掛金	1,113

(注) 1 取引条件及び取引条件の決定方針等
市場価格等を勘案して価格交渉のうえ、取引条件を決定しております。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金(百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合(%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額(百万円)	科目	期末残高(百万円)
同一の親会社を持つ会社	J F E 商事鉄鋼建材(株)	東京都千代田区	1,500	建材製品等の販売		大口仕入先	商品の仕入等	13,206	買掛金	6,273
							商品の販売先	商品の販売等	1,640	売掛金
同一の親会社を持つ会社	J F E 西日本ジーエス(株)	広島県福山市鋼管町1番地	50	総合サービス業		商品の貸出先	商品の賃貸等	2,232	売掛金	892

(注) 1 取引条件及び取引条件の決定方針等
市場価格等を勘案して価格交渉のうえ、取引条件を決定しております。

2. 親会社又は重要な関連会社に関する注記

(1) 親会社情報

J F E ホールディングス株式会社
(東京証券取引所に上場)
J F E スチール株式会社
(非上場)

(2) 重要な関連会社の要約財務情報

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
1株当たり純資産額	1,632.75円	1,748.77円
1株当たり当期純利益金額	91.38円	95.05円

(注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
 2 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎

項目	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
1株当たり当期純利益金額		
親会社株主に帰属する当期純利益(百万円)	3,326	3,428
普通株主に帰属しない金額(百万円)	-	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益(百万円)	3,326	3,428
普通株式の期中平均株式数(千株)	36,396	36,071

(重要な後発事象)

(株式取得による持分法適用関連会社化)

当社は、2023年4月26日開催の取締役会において、シンガポールとマレーシアにおいて重仮設業を行うFUCHI Pte. Ltd. (以下、「FUCHI社」)の発行済株式の30%を取得することを決議し、同日付で株式譲渡契約を締結いたしました。また、2023年6月1日にFUCHI社の株式を取得し、同社を持分法適用関連会社化いたしました。

1. 株式取得の理由

FUCHI社はシンガポールとマレーシアを拠点に重仮設業を展開しております。同社はSingapore Structural Steel Societyの最高グレード認証資格であるS1を取得するなど高い技術力を有し、MRT(シンガポールの都市高速鉄道)建設工事を中心に多くの地下工事を手掛けております。

シンガポールの事業環境は、公共工事を中心とした安定需要が今後も見込め、当社グループの中長期的な成長戦略に必要な海外事業展開を推進していくにあたって、最適な市場と考えております。

当地において高い技術力と顧客基盤を有するFUCHI社と、当社グループの国内営業ネットワークやオペレーション手法を組み合わせることにより、事業拡大のシナジー創出も期待できることから、将来的な子会社化を視野に入れたうえで、今般、本件株式を取得することといたしました。

2. 被取得企業の概要

(1) 名称	FUCHI Pte. Ltd.
(2) 所在地	12 Arumugam Road, #04-01 LTC Building B, Singapore
(3) 代表者の役職・氏名	Chairman Liao Jen Jun(廖人俊)
(4) 事業内容	重仮設業
(5) 資本金	4,000千SGD(シンガポールドル)
(6) 設立年月日	2007年11月12日

3. 取得株式数、取得価額及び取得前後の所有株式の状況

(1) 異動前の所有株式数	0株
(2) 取得株式数	1,200,000株
(3) 取得価額	14,664千SGD 取得価額は契約に定める価格調整を反映させる前の金額となります
(4) 異動後の所有株式数	1,200,000株(議決権所有割合:30.0%)

4. 契約締結日及び株式取得日

(1) 契約締結日	2023年4月26日
(2) 株式取得日	2023年6月1日

【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	-	-	-	
1年以内に返済予定の長期借入金	-	520	0.46	
1年以内に返済予定のリース債務	-	-	-	
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	2,110	1,725	0.46	2024年3月31日 ~ 2026年10月30日
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	-	-	-	
その他有利子負債	-	-	-	
合計	2,110	2,244		

- (注) 1 借入金の「平均利率」については、期中平均残高に対する加重平均利率を記載しております。
2 リース債務の「平均利率」については、期末残高に対する加重平均利率を記載しております。
3 長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年以内における返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	1,155	-	570	-

【資産除去債務明細表】

該当事項はありません。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高 (百万円)	25,892	54,575	87,691	120,521
税金等調整前四半期(当期)純利益金額 (百万円)	780	1,817	3,607	5,102
親会社株主に帰属する四半期(当期)純利益金額 (百万円)	490	1,188	2,406	3,428
1株当たり四半期(当期)純利益金額 (円)	13.45	32.64	66.09	95.05

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額 (円)	13.45	19.19	33.45	29.15

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	308	457
受取手形	4,271	3,056
売掛金	25,979	26,296
電子記録債権	9,111	10,492
建設仮設材	20,347	21,054
商品	1,858	2,239
製品	773	897
仕掛品	670	978
原材料	628	880
預け金	9,300	3,500
前払費用	82	84
短期貸付金	212	82
その他	127	156
貸倒引当金	17	11
流動資産合計	73,649	70,160
固定資産		
有形固定資産		
賃貸用建設機械	27	0
建物	2,058	1,973
構築物	727	754
機械及び装置	1,461	1,552
車両運搬具	20	55
工具、器具及び備品	120	120
土地	12,384	12,384
建設仮勘定	46	133
有形固定資産合計	16,844	16,971
無形固定資産		
ソフトウェア	598	590
電話加入権	28	28
その他	133	83
無形固定資産合計	759	701

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
投資その他の資産		
投資有価証券	1,998	2,239
関係会社株式	624	3,217
関係会社長期貸付金	299	120
破産更生債権等	15	14
長期前払費用	22	20
前払年金費用	2,034	2,478
繰延税金資産	55	-
会員権	174	169
その他	317	713
貸倒引当金	143	138
投資その他の資産合計	5,394	8,832
固定資産合計	22,996	26,504
資産合計	96,646	96,664
負債の部		
流動負債		
支払手形	2,061	1,365
電子記録債務	11,632	12,915
買掛金	18,562	17,397
短期借入金	-	410
未払金	1,097	1,209
未払費用	220	231
未払法人税等	708	1,049
前受金	1,394	1,476
預り金	4,898	4,276
賞与引当金	907	940
役員賞与引当金	24	18
受注損失引当金	67	162
その他	137	117
流動負債合計	41,705	41,566
固定負債		
長期借入金	2,110	1,700
繰延税金負債	-	373
再評価に係る繰延税金負債	1,578	1,578
退職給付引当金	89	141
役員退職慰労引当金	123	59
固定負債合計	3,901	3,851
負債合計	45,606	45,417

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	4,398	4,398
資本剰余金		
資本準備金	4,596	4,596
資本剰余金合計	4,596	4,596
利益剰余金		
利益準備金	490	490
その他利益剰余金		
買換資産特定積立金	48	47
別途積立金	14,838	14,838
繰越利益剰余金	26,734	26,752
利益剰余金合計	42,110	42,127
自己株式	25	0
株主資本合計	51,078	51,120
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	961	1,127
土地再評価差額金	1,000	1,000
評価・換算差額等合計	39	126
純資産合計	51,039	51,247
負債純資産合計	96,646	96,664

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当事業年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
売上高	103,557	105,826
売上原価	87,907	89,715
売上総利益	15,651	16,111
販売費及び一般管理費	² 11,292	² 11,622
営業利益	4,359	4,489
営業外収益		
受取利息	10	5
受取配当金	555	408
固定資産売却益	99	5
その他	28	18
営業外収益合計	693	437
営業外費用		
支払利息	19	12
固定資産処分損	6	4
支払補償費	8	-
自己株式取得費用	-	2
その他	1	1
営業外費用合計	34	19
経常利益	5,019	4,907
特別利益		
関係会社貸倒引当金戻入額	³ 50	³ 4
子会社株式売却益	-	⁴ 63
投資有価証券売却益	-	⁵ 199
特別利益合計	50	267
特別損失		
減損損失	⁶ 467	-
特別損失合計	467	-
税引前当期純利益	4,601	5,174
法人税、住民税及び事業税	761	1,212
法人税等調整額	568	355
法人税等合計	1,329	1,567
当期純利益	3,273	3,607

【売上原価明細書】

		前事業年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)		当事業年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	
区分	注記 番号	金額(百万円)	構成比 (%)	金額(百万円)	構成比 (%)
商品売上原価					
商品期首棚卸高		24,140		22,977	
当期商品仕入高		51,701		56,917	
当期製品製造原価	1	9,733		10,597	
合計		85,574		90,491	
他勘定振替高	2	7,478		7,927	
商品期末棚卸高		22,977		24,190	
商品売上原価合計		55,119	62.7	58,373	65.1
賃貸原価					
建設仮設材減耗費		4,681		4,526	
賃貸用建設機械減価償却費		14		4	
賃借料		5,399		5,296	
賃貸原価合計		10,093	11.5	9,825	11.0
請負工事原価					
外注費		16,547		15,418	
減価償却費		6		55	
工事機械補修費		17		16	
請負工事原価合計		16,570	18.9	15,489	17.3
その他の原価					
建設仮設材修理原価		1,224		1,272	
(うち外注費)		(1,197)		(1,243)	
運送費		4,899		4,756	
賃貸用建設機械売却原価		-		-	
その他の原価合計		6,124	7.0	6,028	6.7
売上原価合計		87,907	100.0	89,715	100.0

(注) 1 原価計算の方法は、鋼製山留材、覆工板等については実際原価による組別総合原価計算の方法により、スチールセグメント、H形支保工等の個別受注品については実際原価による個別原価計算の方法により実施しております。

2 他勘定振替高の内訳は次の通りであります。

	前事業年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当事業年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
貸原価へ振替えた建設仮設材 減耗費	4,681百万円	4,526百万円
材料費への振替高	2,780	3,390
その他	17	12
計	7,478	7,927

【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本							
	資本金	資本剰余金	利益剰余金				利益剰余金合計	
			資本準備金	利益準備金	その他利益剰余金			
					買換資産特定積立金	別途積立金		繰越利益剰余金
当期首残高	4,398	4,596	490	48	14,838	26,761	42,137	
会計方針の変更による累積的影響額						2,230	2,230	
会計方針の変更を反映した当期首残高	4,398	4,596	490	48	14,838	24,531	39,907	
当期変動額								
剰余金の配当						1,274	1,274	
買換資産特定積立金の取崩				0		0	-	
土地再評価差額金の取崩						204	204	
当期純利益						3,273	3,273	
自己株式の取得								
自己株式の消却								
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)								
当期変動額合計	-	-	-	0	-	2,203	2,203	
当期末残高	4,398	4,596	490	48	14,838	26,734	42,110	

	株主資本		評価・換算差額等			純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	土地再評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	24	51,106	1,109	796	313	51,419
会計方針の変更による累積的影響額		2,230				2,230
会計方針の変更を反映した当期首残高	24	48,876	1,109	796	313	49,189
当期変動額						
剰余金の配当		1,274				1,274
買換資産特定積立金の取崩		-				-
土地再評価差額金の取崩		204				204
当期純利益		3,273				3,273
自己株式の取得	0	0				0
自己株式の消却						-
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)			148	204	352	352
当期変動額合計	0	2,203	148	204	352	1,851
当期末残高	25	51,078	961	1,000	39	51,039

当事業年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本							
	資本金	資本剰余金	利益剰余金					利益剰余金合計
		資本準備金	利益準備金	その他利益剰余金				
				買換資産特定積立金	別途積立金	繰越利益剰余金		
当期首残高	4,398	4,596	490	48	14,838	26,734	42,110	
会計方針の変更による累積的影響額								
会計方針の変更を反映した当期首残高	4,398	4,596	490	48	14,838	26,734	42,110	
当期変動額								
剰余金の配当						1,274	1,274	
買換資産特定積立金の取崩				0		0	-	
土地再評価差額金の取崩								
当期純利益						3,607	3,607	
自己株式の取得								
自己株式の消却						2,315	2,315	
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)								
当期変動額合計	-	-	-	0	-	18	18	
当期末残高	4,398	4,596	490	47	14,838	26,752	42,127	

	株主資本		評価・換算差額等			純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	土地再評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	25	51,078	961	1,000	39	51,039
会計方針の変更による累積的影響額						-
会計方針の変更を反映した当期首残高	25	51,078	961	1,000	39	51,039
当期変動額						
剰余金の配当		1,274				1,274
買換資産特定積立金の取崩		-				-
土地再評価差額金の取崩						-
当期純利益		3,607				3,607
自己株式の取得	2,291	2,291				2,291
自己株式の消却	2,315	-				-
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)			165		165	165
当期変動額合計	24	42	165	-	165	207
当期末残高	0	51,120	1,127	1,000	126	51,247

【注記事項】

(重要な会計方針)

1 有価証券の評価基準及び評価方法

子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定しております。)

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法

2 棚卸資産の評価基準及び評価方法

建設仮設材

先入先出法による原価から定額法により計算した減耗費を控除する方法(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

商品、原材料

移動平均法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

製品

個別法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

仕掛品

鋼製山留材、覆工板等については移動平均法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

スチールセグメント、H形支保工等の個別受注品については個別法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

3 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産(リース資産を除く)

定率法

ただし、1998年4月1日以降に取得した建物(建物附属設備を除く)並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については定額法

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

賃貸用建設機械	6～7年
建物	15～47年
構築物	10～15年
機械及び装置	9～10年
車両運搬具	4～5年
工具、器具及び備品	3～15年

無形固定資産

定額法

リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額をリース契約上に残価保証の取決めのあるものは当該残価保証額、それ以外のものは零とする定額法によっております。

4 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権及び破産更生債権等については財務内容評価法により回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員及び執行役員(取締役である執行役員を除く)の賞与支給に充てるため、支給見込額基準により計上しております。

(3) 役員賞与引当金

役員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

(4) 受注損失引当金

受注契約に係る将来の損失に備えるため、当事業年度末における受注契約のうち損失の発生が見込まれ、かつ、その金額を合理的に見積もることができる受注契約について損失見込額を計上しております。

(5) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。また、執行役員(取締役である執行役員を除く)の退職慰労金の支出に備えるため、内規に基づく期末要支給額を計上しております。

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額をそれぞれ発生翌事業年度から費用処理することとしております。

(6) 役員退職慰労引当金

役員の退職慰労金の支出に備えるため、内規に基づく期末要支給額を計上しております。

5 収益及び費用の計上基準

当社は、下記の5ステップアプローチに基づいて、収益を認識しております。

ステップ1：顧客との契約を識別する

ステップ2：契約における履行義務を識別する

ステップ3：取引価格を算定する

ステップ4：取引価格を契約における履行義務に配分する

ステップ5：企業が履行義務の充足時に(又は充足するにつれて)収益を認識する

当社は、主として建設仮設材及び関連商品群の賃貸・販売、仮設工事の施工を行っており、財・サービスの引き渡し、提供を履行義務として認識しております。

(1) 販売に係る収益

原則として顧客に引き渡された時点又は顧客が検収した時点で収益を認識しておりますが、国内の取引については出荷時点で収益を認識しております。

なお、取引において当社が代理人に該当すると判断したものについては、顧客から受け取る対価の総額から仕入先に対する支払額を差し引いた純額で収益を認識しております。

(2) 賃貸及び工事に係る収益

一定の期間にわたり履行義務が充足されると判断しており、賃貸については顧客による財の使用期間に応じ、工事については工事契約における履行義務の充足にかかる進捗度をインプット法により測定し収益を認識しております。

なお、工事契約において進捗度を合理的に見積もることができないが、発生する費用を回収することが見込まれる場合は、原価回収基準にて収益を認識しております。

収益は顧客との契約において約束された対価から、値引き等を控除した金額で測定しております。また、買戻条件が付された建設仮設材の取引に係る収益の認識方法においては、顧客から受け取ると見込まれる対価の額を、見積もった顧客の使用予定期間にわたって収益を認識しております。

なお、取引の対価は履行義務を充足してから概ね1年以内に受領しており、重要な金融要素は含まれておりません。

6 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

退職給付に係る会計処理

未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の貸借対照表における取扱いが連結貸借対照表と異なります。

(会計方針の変更)

「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号2021年6月17日。以下「時価算定会計基準適用指針」という。)を当事業年度の期首から適用し、時価算定会計基準適用指針第27-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準適用指針が定める新たな会計方針を将来にわたって適用することとしております。この適用による財務諸表への影響はありません。

(貸借対照表関係)

1 関係会社に対する資産及び負債

区分表示されたもの以外で当該関係会社に対する金銭債権又は金銭債務の金額は、次のとおりであります。

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
短期金銭債権	10,548百万円	4,089百万円
短期金銭債務	1,753	2,166

(損益計算書関係)

1 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当事業年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
売上高	2,991百万円	1,138百万円
仕入高	3,361	3,314
その他の営業取引高	302	331
営業取引以外の取引高	481	385

2 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額並びにおおよその割合は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当事業年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
給与諸手当	4,612百万円	4,662百万円
賞与引当金繰入額	850	882
退職給付費用	93	98
減価償却費	679	678
おおよその割合		
販売費	76%	74%
一般管理費	24	26

3 関係会社貸倒引当金戻入額

前事業年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

当社の連結子会社であるトラック・エンド・メンテナンス・サービス㈱に対するものであります。

当事業年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

当社の連結子会社であるトラック・エンド・メンテナンス・サービス㈱に対するものであります。

4 子会社株式売却益

前事業年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

該当事項はありません。

当事業年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

当社の連結子会社であるレンタルシステム株式会社の自己株式取得に応じた際の株式譲渡に係る売却益です。

5 投資有価証券売却益

前事業年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

該当事項はありません。

当事業年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

政策保有株式の一部(非上場株式1銘柄)を売却したことにより発生したものであります。

6 減損損失

前事業年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

前事業年度において、当社は以下の資産グループについて減損損失を計上しております。

場所	用途	種類	減損損失(百万円)
北海道地域	事業用資産	土地建物等	411
千葉県白井市	遊休資産	土地建物等	56

(減損判定の方法)

原則として、本業に関わる事業用資産とその他の資産に分類し、当社の事業用資産に関しては地域別にグルーピングを行っております。また、その他の資産に含まれる賃貸用不動産、遊休資産及び処分予定資産に関しては物件ごとにグルーピングを行っております。

北海道地域に保有する土地建物等については、北海道地域における重仮設事業の収益性が低下したことに伴い当該資産の帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。なお、事業用資産の回収可能価額は、正味売却可能価額により算定しております。正味売却可能価額は鑑定評価基準等を基に測定した金額により評価しております。

また、千葉県白井市に保有する土地建物等については、老朽化した倉庫の解体に伴う当該資産の遊休化により、帳簿価額を回収可能価額まで減額しております。なお、遊休資産の回収可能価額は、鑑定評価基準等を基にした正味売却可能価額により評価しております。

当事業年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

該当事項はありません。

(有価証券関係)

前事業年度(2022年3月31日)

子会社株式及び関連会社株式(貸借対照表計上額 子会社株式361百万円、関連会社株式263百万円)は、市場価格がないことから、時価を記載しておりません。

当事業年度(2023年3月31日)

子会社株式及び関連会社株式(貸借対照表計上額 子会社株式2,954百万円、関連会社株式263百万円)は、市場価格がないことから、時価を記載しておりません。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
繰延税金資産		
収益認識基準変更	608百万円	360百万円
賞与引当金	277	288
貸倒引当金	29	26
会員権評価損	80	80
未払事業税	51	64
未払社会保険料	38	39
役員退職慰労引当金	38	18
子会社株式	2	2
その他	131	176
繰延税金資産小計	1,254	1,053
評価性引当額	122	120
繰延税金資産合計	1,132	933
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	425	498
前払年金費用	622	758
その他	30	50
繰延税金負債合計	1,077	1,305
繰延税金資産(負債)の純額	55	373

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
法定実効税率	30.58%	- %
(調整)		
交際費等永久に損金に 算入されない項目	1.10	-
受取配当金等永久に益金に 算入されない項目	3.23	-
住民税均等割	0.95	-
評価性引当額	0.34	-
税額控除	0.05	-
その他	0.14	-
税効果会計適用後の法人税等の 負担率	28.88	-

当事業年度は、法定実効税率と税効果会計適用後の法人税の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。

(企業結合等関係)

連結財務諸表「注記事項(企業結合等関係)」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

(収益認識関係)

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、連結財務諸表「注記事項(収益認識関係)」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

(重要な後発事象)

連結財務諸表「注記事項(重要な後発事象)」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産	賃貸用建設機械	27	-	24	4	0	16
	建物	2,058	74	1	158	1,973	6,071
	構築物	727	109	0	82	754	2,602
	機械及び装置	1,461	507	1	416	1,552	6,164
	車両運搬具	20	55	0	20	55	199
	工具、器具及び備品	120	60	0	60	120	1,061
	土地	12,384 [578]	-	-	-	12,384 [578]	-
	建設仮勘定	46	894	806	-	133	-
	計	16,844	1,700	832	740	16,971	16,112
無形固定資産	ソフトウェア	598	237	-	245	590	-
	電話加入権	28	-	-	-	28	-
	その他	133	187	237	0	83	-
	計	759	424	237	245	701	-

- (注) 1 土地の[]の数字は内数で、土地の再評価に関する法律(平成10年3月31日公布法律第34号)により行った事業用土地の再評価実施前の帳簿価額との差額であります。
2 無形固定資産のその他の主なものはソフトウェア仮勘定であります。

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	159	63	74	149
賞与引当金	907	1,809	1,775	940
役員賞与引当金	24	18	24	18
役員退職慰労引当金	123	21	86	59
受注損失引当金	67	162	67	162

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

特記すべき事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	
買取手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	電子公告により行う。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載する。 公告掲載URL： https://www.gecoss.co.jp/
株主に対する特典	なし

(注) 単元未満株式についての権利制限

当社の株主はその有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない旨を定款に定めております。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等の会社名 JFEスチール株式会社

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度(第55期)(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)2022年6月23日関東財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

2022年6月23日関東財務局長に提出

(3) 四半期報告書及び確認書

(第56期第1四半期)(自 2022年4月1日 至 2022年6月30日)2022年8月3日関東財務局長に提出

(第56期第2四半期)(自 2022年7月1日 至 2022年9月30日)2022年11月2日関東財務局長に提出

(第56期第3四半期)(自 2022年10月1日 至 2022年12月31日)2023年2月3日関東財務局長に提出

(4) 臨時報告書

2022年6月23日関東財務局長に提出

金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(株主総会における議決権行使の結果)の規定に基づく臨時報告書であります。

(5) 自己株券買付状況報告書

2023年2月7日、2023年3月7日関東財務局長に提出

(6) 有価証券報告書の訂正報告書及び確認書

事業年度(第55期)(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)2023年6月9日関東財務局長に提出

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2023年 6月22日

ジェコス株式会社
取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 中 村 裕 輔

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 脇 本 恵 一

< 財務諸表監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているジェコス株式会社の2022年4月1日から2023年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、ジェコス株式会社及び連結子会社の2023年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当連結会計年度の連結財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、連結財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

重仮設事業に係る売上高の期間帰属の適切性	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>注記事項（セグメント情報等）に記載されているとおり、会社の2023年3月期における重仮設事業に係る売上高は107,509百万円であり、連結売上高の89%を占めている。</p> <p>また、注記事項（収益認識関係）に記載されているとおり、重仮設事業の売上の中に、一時点で移転される財及びサービスの売上高が74,223百万円含まれている。</p> <p>会社は、中期経営計画において、主力である重仮設事業の競争力をさらに高めて業界トップシェアのポジションを盤石化するとともに、周辺事業の規模拡大を加速させ、事業規模・利益水準をともに拡大することを目指している。そのため、売上高は会社及び財務諸表利用者が重視する指標の一つであり、売上高が正しい期間で連結財務諸表に計上されることは重要である。</p> <p>一時点で移転される財及びサービスは、1件当たりの取引金額が多額となる傾向にあり、特に金額的に占める割合が高い重仮設事業における一時点で移転される財及びサービスの期末月の売上高は業績達成に与える影響が大きいことから重要である。</p> <p>このため当監査法人は、重仮設事業の期末月における売上高の期間帰属の適切性について、監査上の主要な検討事項と選定した。</p>	<p>当監査法人は、重仮設事業に係る売上高の期間帰属が適切に行われていることを検討するにあたり、以下の手続を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一時点の収益認識に関する内部統制の整備状況及び運用状況を評価した。 ・業界の市場環境の動向や事業活動の理解のため、経営者とのディスカッションを実施した。 ・期末月の売上取引の注文事実や出荷事実を確認するため、売上形態別の増減分析を実施し、金額的重要性に応じて抽出したサンプルについて、計上の根拠証拠である注文書、納品書との照合を実施した。 ・期末日後の値引・訂正状況を分析し、根拠資料である値引・訂正の申請書等の照合を実施した。 ・期末日後に実施された売掛金の滞留調査結果を閲覧し、売上債権の滞留理由が、売上の早期計上を示唆するようなものでないことを検証した。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の連結財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

連結財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と連結財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうか検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

連結財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・ 連結財務諸表に対する意見を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当連結会計年度の連結財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

< 内部統制監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、ジェコス株式会社の2023年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、ジェコス株式会社が2023年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

内部統制報告書に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・ 財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2023年 6月22日

ジェコス株式会社
取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 中 村 裕 輔

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 脇 本 恵 一

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているジェコス株式会社の2022年4月1日から2023年3月31日までの第56期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、ジェコス株式会社の2023年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

重仮設事業に係る売上高の期間帰属の適切性

連結財務諸表の監査報告書に記載されている監査上の主要な検討事項（重仮設事業に係る売上高の期間帰属の適切性）と同一内容であるため、記載を省略している。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうか検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

- (注) 1 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。